

2026年3月25日公開

宮脇 修一 オーラル・ヒストリー

ZEN 大学  
コンテンツ産業史アーカイブ研究センター

収録日 : 2024年10月17日  
インタビューイー : 宮脇 修一  
インタビュアー : 井上 伸一郎・氷川 竜介  
インタビュー時間 : 2時間46分36秒  
著作権者 : ZEN 大学 コンテンツ産業史アーカイブ研究センター

#### 注意

- ・この資料は、著作権法（明治32年法律第39号）第30条から47条の8に該当する場合、自由に利用することができます。ただし、同法48条で定められるとおり出所（著作権者等）の明記が必要です。
- ・なお、現代では一般的ではない表現や、特定の個人・企業・団体に関する記述を含め、必ずしも元所属組織による事実確認や公式な承認を経たものではない内容についても、ご本人の記憶等に基づく一次資料であることの意義を重視し、改変や削除などは施さずに公開しています。
- ・宮脇氏以外の発言は「——」となっています。
- ・はっきりと聞き取れなかった部分や、不明な箇所を「■■■」とし、あいまいな部分には「(?)」を付しています。

#### オーラル・ヒストリー

##### ○イントロダクション

——インタビュアーの井上伸一郎です。

——氷川竜介です。

——本日は2024年10月17日です。これから、宮脇修一氏のオーラル・ヒストリーのインタビューを海洋堂本社にて行います。よろしくお願いします。

##### ○幼少期の生い立ちと模型屋としての「海洋堂」のはじまり

——今日の大きなテーマが海洋堂（：株式会社海洋堂）さんがいかんにしてこのフィギ

ユアを軸として文化を生み出したのかということをございます。宮脇専務。センムというのはいもう芸名みたいになっていらっしやる。今日はセンムとして。

宮脇：はい。センムでもうずっと、40年センムを名乗っていますね。

——1957年（：生まれ）ということで、いわゆるオタク第一世代と言われる世代だと思うんですけども、元々お父様が海洋堂という模型屋さんを創業なさってて、その2代目としてお育ちになられたと思うんですけども、センムが幼少期に家業の模型屋さんで育って、どんな少年だったんですか？

宮脇：小学校1年生のときに海洋堂という模型屋さんを始めてもらいました。うちの父はそれまでは売れない小説家だったんです。海洋堂というのは、それまでは町の貸本屋だったんですよ。本屋さんから僕は、そろそろ父がそれこそ、さすらいの旅を続けながら1カ月、2カ月、文筆活動に外へ出ていくと帰ってこないような人でしてね。でも小学校1年生に息子が入ることだし、そろそろ正業に就こうかということで、当時幼稚園の僕が大好きだったプラスチックモデル。プラモがですね、当時はそれこそ木とかセルロイドとかブリキとかしかなかったおもちゃなんか、そのプラスチックを使った模型というプラスチックモデルというのが出出した頃でした。

あまりにもそれまでの、例えばキャラクターもの、零戦であっても戦車であっても何であっても、みんなキャノピーは透明だし、リベットはちゃんとモールドされているし、全部今までブリキとかソフトミルなセルロイドとかのおもちゃとは違う。本当に薄っぺらい幼稚なロボットなんかに至っては、その当時から僕も幼稚園頃からリアル思考というか。「なんじゃこれは」という「幼稚臭いロボットやな」とか、そういう乗り物、バスにしても何にしても窓に人の絵が描いてあったりするものに比べると、プラスチックモデルのその素晴らしさというのは全然リアリティが全く違う。戦車はキャタピラを回して砂の上を動く。零戦はキャノピーがきれいに透明のキャノピー、風防がついている。リベットまで打ってある。戦艦ヤマトはちゃんと水の上で走ったりする。

特に僕の中で幼稚園の頃、模型屋さんに入る前に一番最初に強烈な思い出は、富山、現トミー（：株式会社トミー）。タカラトミー（：株式会社タカラトミー）が出しているキャッチャーボードという捕鯨船がこれくらいの大きさに150分の1でずいぶんリアルでね。それをたらいの上で走らせたりとかしながら楽しんでいる少年で、父がそうやって息子が好きなプラモ屋を始めようということで1年生から始めてもらったんですが。

当時プラスチックモデルというのは、プラモというのは50円、100円というのは当時の子供さんにとってはとんでもない高い。今でいうところの1,000円、2,000円、3,000円単位を出してもなかなか買えないような模型だったので。その宝物に囲まれた宮脇少年は、本当に王子様というか。小学校時代はそれこそジャイアンとのび太を足したような最強の人間であって。お金はないけどプラスチックモデルというバックボーンがあり、そして割とお客さんに対して、僕もずっと小学校1年生、2年生、3年生

ぐらいから店番をお手伝いしながら。言うたら上から目線というかですね、お客さんに対する店のお兄ちゃんとして活躍することで、結構そういうキャラとなっていましたね。

——お兄ちゃんといっても周りも子供ですから、ほぼ同世代の方ですね。

宮脇：そうなの。ただ、宮脇少年が良かったのは、うちの父がすごくアイデアマンの模型屋さんで。普通の模型屋さんというのは、ただプラモが好きな、普通にプラモを仕入れて売るだけの方が多かったんですけど、うちの父は本当にいろんなものにテーマ、スローガン、アイデアを入れて。このイマイ？（：今井科学株式会社）の『鉄人28号』という素晴らしいプラモが小学校2年生の時から出たんですけど、『鉄腕アトム』もしかりなんですけど、もう30個、40個の完成品を作って、それが鉄人を金色でやったり茶色でやったり、ブローグレーであったり「ガーコン、ガーカン」と動かすわけですよ。そうすると、ただでさえ人気のあるプラスチックモデルが、その時日本で一番タミヤ（：株式会社タミヤ）の戦車を2年続けて売ったりとか、街の大阪にある模型屋さんでしたけど、すごくそういうリーダーシップを持っている模型屋さんとして。

それこそメーカーさん、小売店、いろんな人たちがうちに見に来るところであったりとか。店に来ているお客さんも、当時のうちに来るお客さんはすごくそういう意味で、今だからその後もそうだったんですけど、ハイレベルな。それこそ飛行機の僕にとっての師匠みたいな、ハダさん、ミヤタニさんとか、自動車だったら、マスダさんという、本当に神のような模型のおじさんたちが「しゅうくん」という修一坊ちゃんをみんなが可愛がってくれるわけなんです。一人っ子であったし、そういう大人に囲まれるのは昔から得意であったので、そうやってお兄さんたちにまずは模型の教育を受け、来ている子どもさんたちにとっては店のお兄ちゃんとして、来ている同世代の子どもの代表としてお付き合いをしてあげるといって、なかなかいい。本当に王子様体験をしていたんですね。

## ○「海洋堂」の経営への参画とオリジナルフィギュアのはじまり

——そうして、少年が成長なさって。ご実家の模型店の経営に参画しようと思われたのはいつぐらいですか？

宮脇：僕は中学2年生ぐらいからは、ずっとお店の店番をしまして。うちの父はその時は、ARTPLAという模型作家ということでプラスチックモデルを使った完成品を、帆船を販売したり、いろんな自動車を作って売ったり、建物を作って売ったり、工房を作ってひたすら模型のプロとして。つまりその時海洋堂が目指していたものは、プラスチックモデルというのはすごくよく売れているし、日本中、模型の黄金時代でしたからプラモ屋さんって一つの小学校があったり中学校があると5軒、10軒、プラモ屋、おもちゃ屋、教材屋、ありとあらゆる文具屋。そういうところでプラスチックモデルってどこでも売っていたんです。ただ、海洋堂がそれだけいろんなプロモーショ

ンを行うと、町のPTAとか学校の先生が「海洋堂には行ってはいけません」と。つまり当時はプラスチックモデルなんか作ったらバカになるとか、物を作らない。それは漫画ともっとそうじゃないですか、僕らの一世代前に大学生が『少年マガジン（：週刊少年マガジン）』で『あしたのジョー』を読んでいることがとか、いろいろと言われたりとか。手塚治虫がずっといろいろと（：手塚治虫が自分の本がPTAに焚書されたことを何度も書いている）書かれていますけど、それこそ50年代は大阪の小学校2つぐらいで『鉄腕アトム』も持ってきて焚書（：実際に学校の校庭などで漫画本が燃やされた例もある。）をするような、そういう世の中に対してはプラスチックモデルなんかとか、そういう漫画なんかましてやテレビアニメを見ていると「あんなことしていたらバカになるよ」と言われる評価がすごく低かったの。僕もプラスチックモデル屋さん、プラモ屋さんやりながら店番しながら大人の人が来ても、「ちゃんとしっかり包装してください」と。プラモであることがバレないようにしておかなければいけないという評価がすごく低かったの、じゃあうちの父が60年代終わりから70年ぐらいから始めたARTPLAというのは、プラモのプロになろうと。今ではプロモデラーとか、プロの模型作家というのはだいぶメーカーの完成品を作ったり、自分で作ったものを売ったりするのはこの5年、10年ぐらいでできましたけれども、プロゴルファー、プロ野球選手、プロレスラーがあるんだったら、プロモデラーがいるべきであろうという模型作家を目指す形で、そういうのを啓蒙しようとしてひたすらアトリエにこもって、スタッフとともにプラモ、造形、製作活動をやっていたんですが。

僕は、お母ちゃんもお家でいろいろ家事もやっていたので、中学校2年生からは、学校から帰る3時ごろからは、ずっと店番をしながら。月に1、2回は、東京へ蔵前とか、そういうところに仕入れに行ったり、模型問屋に仕入れに行ったりということで。うちが海洋堂という看板を背負っているの、「海洋堂の宮脇坊ちゃん」ということで、どこもみんな大変よくしてくれるわけで。中学生でも東京に行ったときも、例えばホビージャパン（：株式会社ホビージャパン）の当時の佐藤社長（：佐藤光市）という代表の人とか、いろんな問屋さんに行ってもどこに行っても海洋堂の坊ちゃんなので可愛がっていただいて、良い商売、仕入れもでき。（：輸入品も）エアフィックス（：Airfix）というメーカーであったり、モノグラム（：Monogram）の商品を入れたりとか。そういう海外品の品ぞろえであったり、模型問屋としての相手をしながらプラモ屋さんとして、「これは今度は売ろう」とか、「これ素晴らしいね」ということで良い模型屋さんをずっと子供ながら手伝っておったのが、ませた少年だったので。今の『ジャリン子チエ』じゃないですけど、周りは「うちは生活してお金稼いだるんじゃ」というね、自分の中では割と傲慢な、ひどい少年であったと思います。

——子供の頃からOJTというかね。

宮脇：そうなんです。だから、それこそ中学卒業している時には、僕の方は頭の中では海洋堂に入って、そのまま世界一の模型屋さんになるんじゃないという、すごい野心を持って、この業界に入ったんですが。ですからちょうど中学卒業して、うちの模型

屋さんをやっている時に、うちの今でも BOME は当時小学校 4 年生からうちのお客さんでしたし、他にもうちに中学校から来ているお客さんで上田（：上田忠明）というものであったり、他に 5、6 人くらいの親衛隊が、宮脇くんの子分たちがおまして、今でもうちの仕事を海洋堂の社員になったり手伝っておるので。彼らに証言させれば分かるんですが、当時の海洋堂。言うたら宮脇少年が 1972 年にプラモ屋さんを引き継いで店をやっていた時も、完成品の数、品揃え、接客態度というか、来たらもうキャッチセールスのように「絶対うちのファンにするぞ」というつもりでこういう喋りをしながらですね。

うちのお店というのが、当時はうちのお父ちゃんが面白いことを考えて入口の半分ぐらい、玄関にですね、うどん屋さんがよく前で手こねをやっているじゃないですか。あそこの店の前が工房になって、僕が中に入って、完成品を作りながら店番したりとかしてましたので、模型を作る量も大変なたくさん。模型の、言うたら仕入れをするにしても普通の模型屋さんと違って、「この模型はどれが素晴らしいか」、つまり魚屋とか野菜屋のものを見るのと一緒で、ある意味目利きの目を自分は持っていたということで、大変魅力的なプラモ屋である。「世界一魅力的なプラモ屋であることは胸を張って、当時のお前も喋ってくれるよな」ということで。あの模型屋さんに来た少年たちが、そもそも海洋堂の言うたら原動力にもなったやつらなんですけどね。

——お客さんも同時に育っていったって感じなんですね。

宮脇：そうですね。だからそういう集まりの場として、場の提供としての海洋堂は昔からそういうふうになっておりました。

——同時に実演販売的な感じになる。

宮脇：店に来ているお客さんたちにも、例えば BOME なりとか、当時中学生ぐらいとか高校生ぐらいでみんなそんなにお金を持ってないので、ただ常連というのは店に来ると迷惑極まりないですよ。何も買わないのに、ずっといる人間が毎日来ていると。「じゃあ君たちに居場所を与えてあげよう」ということで、艦船と一緒に作ったりとか、みんなでスクラッチした大きな戦車を作ったりとか。中の方でワイワイとみんなで作る、模型の言うたら溜まり場にもなっていたのを作っておりましたね。そうやってみんな面白い店として、いろいろと腕に覚えのあるモデラーさんもやってきたりとかいうことで。「あ、こんなものを作っているんですか」とか、いろんなものを持ち込む人も多かったりとかするのが、こういう仕事をどんどん広げていくきっかけになっておりますかね。

——そうやって 70 年代にそういうふうには、家業を引き継がれるような形で自然とスタートなさったと思うんですけど、そのうち実際に海洋堂さんでオリジナルのフィギュアを作り始めるようになると思うんですけど、そのきっかけってどういうことですか？

宮脇：きっかけは最初はね、それこそ 70 年代後半、76、7 年くらい『宇宙戦艦ヤマト』(74)があり、それからホビージャパンでも松本零士特集とか『スター・ウォーズ』が始まり『ヤマト』『スター・ウォーズ』からのキャラクターモデルが。言うたら僕も子供の時から最初は『サンダーバード』で。『スティングレイ』（：海底大戦争 スティングレイ？）か。小学校 4 年生か。『スティングレイ』『サンダーバード』それから『ウルトラQ』『ウルトラマン』って、ああいう素晴らしい特撮が少年の原体験でテレビを見て入っているものですから、キャラクターものは大好きなわけなんです。映画ものであって、当然そういうことも深く見ている方からすると。

ただプラモに関しては本当にタミヤ模型であろうが、恐竜を作ろうが、『ジョー90』は素晴らしかったですけどね、それこそ今井科学の『マイティジャック』も『サンダーバード』にしてもよくはできていますけど、やっぱりモーターが、でっかいタイヤがモーターライズのためにいらんところにミサイルが出たりとか、キャラクターものに至っては 50 円のフィギュアなんか全部首が飛ぶとかですね。「なんで首が飛ぶかな」と。結構すごかったですけどね。そういうプラモに関しては、特にマルサン（：マルサン商店）のプラモのひどさに関しては、子供心から。ガラモン（：『ウルトラQ』の怪獣）がパカッ（：箱を開く仕草）。「はあ？」って。「これガラモンなら、ヒレヒレが何百個もついてるんだよ」とかね。パゴスはまあまあかも知れんと思うけど、ウルトラマンにしても何にしても「こんなん、ちゃうわ」と。ゴジラに至っては、「これ何がゴジラやねん」と。ゴジラって。箱絵は言われたら金ゴジラ、モノグラムのコピーをしたようなものでありましたから。そんなものがね、僕らにとっては、「はあ」って子供の頃にイライラしながら。『宇宙戦艦ヤマト』でさえ第三艦橋がなくですね、でっかい車輪がついてる。ゼンマイボックスが。

——やっぱりまだ子供向け。

宮脇：そうです。『ヤマト』でさえそれであった。そういうものがあつた。『スター・ウォーズ』から割とリアルな MPC のもありましたけど、まだまだ足らんということ。そういう時にうちに海洋堂にいろんなお客さんがいる中で、川口（：川口哲也）さんという歯科技工士の人が、モスラの幼虫を全長 13 センチぐらいですかね。紙粘土で作った原型を、それこそ入れ歯のオストロンレジンか。シリコンでゴム型でギュッと型を取るような形で。

——マウスピースみたいな。

宮脇：そうです。あれを歯を型取る技術で自分で削りながら一個一個、複製を取ったモスラの幼虫が、当時最初 900 円で売る形でうちに持ってきてくれたんですよ。彼は僕のことを海洋堂という形で、（：呼んで）「海洋堂、こんなの作ったんやけどな」ということで、そういうのを持ち込んできて。僕らにとっては、「なんじゃこら」と。つまり、それまでプラモ屋さんに来るのはスクラッチビルド。ゼロから自分でデイス

カバリー号(：「2001 年宇宙の旅」の木星探査船)のすごいスケールモデルみたいな、超絶モデルを作る人間とか、1号戦車、当時タミヤに出てなかった戦車も、すごいクオリティで作る人間はいっぱいいいたんですが、それを複製して。

模型の上手い人はいっぱいおりましたけれども、シリコンを使ってコピーが取れて商品売りもやった。「はあー」ってことで目から鱗だったんですね。当時まだ他にも海洋堂さんってそのお店以外にもスロットカーレーシング。今でいうとミニ四駆みたいなものですけども、そういう世界一大きなサーキットを作り始めてまして、レーシングカーという 180 メートルぐらいの全長がある世界最大のコースを作って。それをたまたまスロットレーシングをやるサーキットにするために大きな倉庫、それこそ入り口から奥まで 45 メートル、幅が 18 メートルという、そういう倉庫の中にでっかいコースを作って走らせるようなことをしていたんですが、それに対してボディを、今は透明のポリカーボネート成形ということでクリアボディ、ラジコンのボディとか自動車のボディで結構あるんですが、そういうポリカーボであったり塩ビの透明なもので作るボディを僕たちは自分たちでいろいろと当時 F1 (：フォーミュラ 1) も 78 年頃というのはちょうど同じ時期に。

ちょうどニキ・ラウダ (：Andreas Nikolaus "Niki" Lauda) とかエマーソン・フィッティパルディ (：Emerson Fittipaldi) とか。それこそ『赤いペガサス』(：漫画のみ)『ルーベンカイザー (：激走!ルーベンカイザー)』というテレビアニメもいっぱいありましたけども、スーパーカーブームからの F1 ブーム。富士スピードウェイでは F1 がジェームス・ハント (：James Simon Wallis Hunt) や『ラントン・VS・ラウダ』の映画もありましたけども、それで盛り上がりつつある中で自分たちがそういう商品が出ていないようなボディを作ったりとかしながら、それを量産することはやっていたんです。クリアボディのレースカーのボディを作っていて、それはプラスチックの板で作ったものだったんですけど。それと川口 (：川口哲也) さんのレジンとがうまく合わさって。

当時もう一つブームになって盛り上がりつつきた絶版プラモブームというのが 70 年代終わりぐらいから。それこそ古いものを模型屋さんで今でもビリケン (：ビリケン商会) さんで。僕も最初に行ってびっくりしたのは昔の大滝 (：大滝製作所) の海底軍艦 250 円ぐらいのものが 5,000 円なんです。今では安い。5,000 円。これが、は？なんで 5,000 円もするの？これがと。マルサンのウルトラホークとかジェットビートル。僕もプラモコレクターとしては世界一、4 万個持っているぞという。プラモに対してはまだ持っているものですから、そういうものが古物がそんな馬鹿げた値段で。今では当たり前ぐらいのものですけど高額で売られているのを見て、「いや、こんなくだらんものが」ということで、たまたま僕も作りたかった、河田のノーチラス号という。1 個しかないわけですよ。やっぱり高いわけですよ。当時売っているのを見てると、7、8 千円ぐらい。1 万円弱ぐらいで売っていると。じゃあこれをレーシングカーのボディで作るような技術で石膏で置き換えて。型を取って、石膏型にして。言ったら最初はプラモのコピーをやって、復刻というか、それと川口さんのレジン怪獣とかが 2 つ同時に並行しながら、模型を自分たちで、キャラクターモデルのリアルなものを作ろうと。

マルサンのジェットビートルとかウルトラホークが昔から不細工な形で寸詰まりやわ、ゼンマイボックスはついてるわ。ホーク 1 号に関しては、なんだこの、電池入れるために  $\alpha$  号がすごく太いんですよ。それを全部モディファイして、だんだんやっているうちに全くのオリジナルのバキュームキットができるようになったり、それからレジンは川口さんがどんどん、どんどんと、ケムール人(：「ウルトラ Q」の怪獣)とか、そういうさまざまなペギラ(：「ウルトラ Q」の怪獣)作ったりとか。タロス(：映画「アルゴ探検隊の冒険」の青銅魔人)作ったりとかして、そういったもので。

海洋堂というのは、そういうオリジナルのキャラクターモデルを作る集結地みたいな。そしてそこがちょうど土居のお店、つまり昔から海洋堂があった 10 坪ぐらいの模型屋さんから、その当時はレーシングカーのやっているサーキットの中の一角にちょっと店を、プラモをそっちへ移してきました。もうスロットレーシングはブームがすぐ去ってしまったので、半分はレーシング場、半分はプラモ屋さんとして海洋堂というのは、大きな巨大な、それこそサティアン以上に。僕らの元祖サティアンですからね。本当にたまり場としての場所が広がったものですから、みんなが集まる場として、わーっと盛り上がってきたのですね。

——なるほど。そのレーシング場の土地というのは、元々海洋堂さんのものだったんですか？

宮脇：いえ。だから、それこそ最初ちょっとブームになった時に、海洋堂、割とえげつない。こんな盛り上がったら貧乏になって、盛り上がったら貧乏になって。レーシング場をやる前は、1年ぐらいがすごくブームになって、いっぱいお金儲かったんです。「やった、いけるぜ」ということで、今度はでかい倉庫借りて世界一の、それこそ本当に 180 メートルで気が狂っているような。それこそ 25 メートルの、ビルサンより長い直線コースであったりとか、でっかいバンクをつけてね。とんでもないコースを作ったんですが、それがあまりにもでかすぎて。つまりル・マン 24 時間レースを毎日やるわけにいけへんわけですわ。つまりモーターなりとか、車に対してもお客さんに対しても、ちょっと負担が多すぎるコースを作って。ちっちゃいコースもあったんですけど。1年ぐらいすると、もうスロットレーシングのブームも下火になってしまっただけ。でも行け行け、ドンドンだったんで、それは毎月家賃が 45 万もかかるような。当時としてはちょっと大変なものだった。

じゃあそれを 1 回全部やめて、以前からやりたかった、83 年頃かな？82 年ぐらいですね。究極のプラモ屋さんを 200 坪の中を使って、海洋堂が昔からやりたかった模型のプール、それってうちの父が、夏になったら店の半分以上使って、10 メーターぐらいの模型の水槽ですね。ブロックを組んで中に水を溜めて、潜水艦とか軍艦とかモーターボートをみんな走らせに来るお店になって、夏場はそれ。冬はその上にジオラマにして、戦車を走らせて。だからタミヤの戦車を 2 年間連続、日本一売れたというのは、ジオラマコースで遊べる場所があったりということを作って、品物もいっぱいあった。

それを全部 200 坪の店の中に、それこそ水槽、模型のプール。これもとんでもない長

さで12メートルかける5メートルぐらいの水槽を、僕らブロックで自分たちで組んで、セメントを張って作ったのと、その横には同じ大きさの戦車のラジコンであったり、リモコンであったり、遊ぶ場所。そしてプラモの販売所、それからみんなが作る工作場。レーシングカーの名残みたいなものを作って、「さあこんな素晴らしいものを用意しましたよ」と言った瞬間に、実は世の中がインベーダーゲームからのテレビゲームブームになってしまっただけ。

——70年代後半で。

宮脇：はい。プラモ屋が全然人が来なくなって。子供さんなりのもので、僕らが用意したものを遊ぶなくなっちゃったので、もうえらいことになってしまっただけ。家賃も出せない、夜逃げするしかないかなというぐらい、大赤字になったりとか。一計を案じて、うちの父も僕も、これはええなと思ったのが、当時は一時、古新聞、古雑誌というのがオイルショックの後、高騰していましたね。じゃあ、集めるとお金になると。となると、町中の子ども守口中にいろんな宣伝をして、「新聞を持ってきたら、古新聞と重さを測って、プラモデルと交換してあげるよ」という。なかなか素晴らしい、なかなかええアイデアだったんですよ。で、大量に貯めた。1回はそれでちょっと売れたりとかして、さあ2回目ぐらいになったら、もう大量に貯めた新聞がですね、古雑誌が暴落しちゃって、クズになってしまっただけ。またこれで大赤字になってしまったりとか、こんなことばかりしてね。

もうやばいなこれ、と思ってたら、じゃあ仕方がない。苦肉の策で、そこにテレビゲームを。広がったもんですから、それこそパックマンとか、クレイジー・クライマーとかですね。もういろんな、そういうギャラガとかの時代に入れたら、これでなんとか家賃だけは、つまりその頃から子供さんは自分で遊ぶことより遊ばされる。つまりゲームって50円入れたら勝手にゲームが素晴らしい。今のゲーム世代も全部そうなんですけど、みんなもう何とか天堂（：任天堂？）、しねと思いますけどね。彼らのおかげでドンキーコングさんとかマリオくんがですね、みんな子供たちの魂をつかむと模型なんか作らないですよ。ただ同じような時代にガンプラブームもあったので、まあまあガンプラからの80年代に来るアニメバブルとかいうので、各80年代半ばまでは潤った時代もありましたけども。

——ガンプラが81年の7月ぐらいからですね。

宮脇：そうなんです。でも今もう品薄ですけど、当時も本当に抱き合わせ販売で。メーカーのせいとか東映（：東映はガンダムに関係なし。）のせいとかは知らないですけど、ガンプラ（：『機動戦士ガンダム』のプラモデル）1ケース欲しかったらあと1ケース48分の1精密電撃機甲師団を買えとか抱き合う。メーカーがですね、クラシックカーシリーズを。3ケースのうちの1ケースはガンダムでいいよと。2ケースは他のものを買えということで買わされるわけです。だから別に抱き合わせ販売当時問題なかったけど、あれって小売屋さんだけの問題ちゃうねんけどなと思いつつも絶対恨み

は忘れへんぞ。というメーカーの名前を言えなくて、4文字のメーカーに「バ」とか言うたら怒られますけど。そう、みんな僕ら万歳して、「ちくしょう！」と思いながらです、万歳してました。

とはいえ、そこでガンプラブームもあったり、キャラクターモデルはまだまだずっとガレージキットというか手作り模型も細々やってたので、そこからちょうど81年ぐらいからかな？ちょうどちょっと戻ると『宇宙船』という雑誌が発行されて、川口さんという人もちょうどそれに紹介され、聖（：聖映奇）さんという、化け物みたいな、体から本当にあのとき悪のオーラというか、すごい、80年代頃の聖さんってなんだろうね。薄暗い、髪の毛をごそっとしながら「若旦那」って。僕のことを彼は「若旦那」と呼んでくれて「アメリカにはなあと、ガレージキットというすごい文化があるんや」。

僕とゼネプロ（：ゼネラルプロダクツ）の当時は岡田斗司夫も騙されてですね、「アメリカ行ったらそんなものがあるぞ」ということで、82年には開田裕治さんとか皆さん連れられてですね、「アメリカにサンディエゴ・コミコン（：サンディエゴ・コミコン・インターナショナル）というものが素晴らしい、天国みたいなものがあるぞ」と言ったけども、行ったら確かにおもちゃはすごかったんですけど、その聖さんというのが日本でのそういうアニメの、アニメじゃない、洋物ですよ。ビリケン（：ビリケン商会）は同じ83年ぐらいにメタルーナ・ミュータント（：映画「宇宙水爆戦」のモンスター）をはじめとして、誰がこんなん買うのか、金星ガニ（：映画「金星人地球を征服」のモンスター）とかイーマ竜（：映画「地球まで2千マイル」のモンスター）とかですね。「レーザーブラスト」の宇宙人とか。僕らは僕らでなんかせえへんけどタロス作ったりとか、半魚人とフランケンとタロスは結構まだまだ著作権というものはそれほど、ちゃんとして同人誌的な形で発売をしながらやってましたので。ちょうどそういうものがメディアがついに『宇宙船』という雑誌が、発刊されたことによって年に4回、季刊ですけども、川口さんが連載したりと。今のこの世界の中心に動いている人間たちもそれぞれそれに参画するようになって、ある意味僕らはそれで火がついたようなものでしたね。80年ぐらいですかね。

——80年創刊ですね。

宮脇：ですよ。80年ぐらいから創刊して81年ぐらいからかな？すぐそれで去年のやつをそうやってバックナンバーも買ったりとかすると、いろんなことを、センス・オブ・ワンダーというか。初めてそういう本格的なSFを、そういうもので教えてもらったものですよ、という形でした。

## ○ガレージキットへの注力と発展

——どんどんそうやって、一種のガレージキットという技術革新みたいなのが起こって、海洋堂さんがどんどんそちらに傾斜していくという形だったんですかね。

宮脇：そうです。造形原理主義国家みたいになって、みんながそういう好きな人間が

集まる場所として。たまり場として、海洋堂というのは怪獣が好きな人間、恐竜が好きな人間、美少女はまだなかなかいなかった。恥ずかしくて。あれはもう 86、87 年ぐらいから本格的にやり出したのは。あの時は『ファンロード』か何かで雑誌に秋山（：徹郎）くんとか三ツ星さんとか、ラムちゃんであったりとか、そういう画期的なフィギュアをみんな作ることはあったけど、なんか恥ずかしくて。肌色人形はまだまだでしたけども、特撮メカ、特撮キャラは堂々と怪獣なり怪人なりができた時代で。

それがちょうど特撮大会という、東京の杉並公会堂でやった、最初に 1 回目はあれですけど 2 回目から僕たちも、ゼネプロという大阪の岡田斗司夫と武田（：武田康廣。岡田と同じく後の GAINAX 設立メンバー）くんがやった、同じような時期にですね、83 年くらいからかな？ちょうど 82 年からかな。特撮大会は 82 年くらいかな、1 回目行ったのが（：第一回アマチュア連合特撮大会は 1981 年 8 月 14、15 日に中野公会堂で開催）。その時はまだ一切何の著作権もなく、素晴らしい作品がいっぱい並んでまして。特殊潜航艇 S21 号（：ウルトラマン）とか、『ミクロの決死圏』のプロテウス号から、それこそジェットビートル。それこそウルトラホークとか。ゼネプロさんもゼネプロさんでいろんなものを売ってたんですけど。そういったものは、あくまでファンダムの活動として、ライセンス、同人誌の立体版じゃと僕らは思っていましたし。別にそんなもので商売になるとは思っていなかったの、本当に身内でやっていたものが。

——あくまで趣味の延長的な。

宮脇：はい。そこでちょうど、円谷プロ（：株式会社円谷プロダクション）さんとか、東宝（：東宝株式会社）さんからもお声掛けていただき、宇宙船を出している朝日ソノラマ（：株式会社朝日ソノラマ）さんの村山実さんという、まるで野球投手みたいな名前の編集長の方が東宝さんとか TBS（：株式会社 TBS テレビ）、円谷プロを版權管理した日音というところを紹介してくれて。円谷プロさんからもすごく前向きなアプローチをもらって。「版權というのを取って売るらしいぞ」ということで、例えば最初に僕らも取ったのがレジンキャストキットで、82 年かな。まずはバキュームフォームは「海底軍艦」の轟天号というのが、初回で 2,000 個くらい売れて、今のフィギュアよりもよっぽどよく売れているかもしれないがそういうのが売れたんですよ。

——2,000 個ですか。

宮脇：2,000 個売れたんですね。その次は、一番最初に僕らも商売っ気というのがあまりなかったの、円谷プロに最初に怪獣申請したのがゼットンにギガス、それからケロニアという、何を考えているんだわれわれは、という感じで。ウルトラマンとか、最初にそんなメジャーなゴジラとか作っちゃいけない気がして。

——普通はレッドキングとか。

宮脇：そうなんです。「ウルトラマンがないじゃないか」と。その後も万城目淳、一

ノ谷博士、アンヌ隊員はすごく良かったんですけど、キーラが最後。というのを続々と作り出したりで、「なんでそんなんばかり」というのが最初のライセンスを取った頃でした。

でも去年の1983年かな？ちょうどガレージキットとして誕生して40年。今年は41年目なんですけども。僕たちがよくいろんなところで、センムさんもいろんな自慢を講演するときに、この前も話してて気がついたのは、1984年、今から40年前に東京の茅場町に海洋堂のギャラリーというのを作って。言うたら世界初のフィギュア専門店。それこそ海洋堂というのはプラモ屋さんがメーカーになったようなもの。当然、バンダイ（：株式会社バンダイ）なんかは当時『B-CLUB』という雑誌もいろんな形で、僕らも安井尚志さんの策略に乗って、素晴らしい仕掛けをやったりとかして。模型のバンダイさんですらプラモメーカーがそういうものをやる時代でした。

僕たちがよく自慢するのは、世界初のフィギュアショップとして、84年に海洋堂ギャラリーというのが茅場町にできたんですけど、それが世界初のフィギュア専門店でした。1年目にしてもうすぐ東京へ出て行って、割と身の程知らずで。「なんで茅場町やねん？」っていったら、僕ら全然東京の地理を知らなかったから地図を見ながら、修正屋さん（：不動産屋さん？）に聞きながら、「ここは東京駅に近いな」とか。

——なるほど。海洋堂の利便性を考えて。

宮脇：「歩いて20分で行けるな」とか。でも土日になったらゴーストタウンで、あそこは株の町ですから。兜町だったんで、全然知らずに。2年後には渋谷に移りましたけれども。

最初にできたフィギュア屋さんが84年の海洋堂のショップであり、そしてその年の暮れに84年の終わりにゼネプロさんが第1回ワンダーフェスティバル、マイナスワンみたいなもので大阪のお店でワンフェス的なものをやり、85年の1月にワンフェスというイベントを始めたのが彼らの1つの大きな転機でした。ガレージキットを文化として広めるために。

僕らはただの、最初は海洋堂が誕生したのとゼネプロがSF大会、第3回です。DAICON3（：1981年、大阪で開催された第20回日本SF大会）の時は、あの時は仲良かったんですけど、岡田斗司夫もうちに『ダイオージャ（：最強ロボ ダイオージャ）』の歌を歌いながら最初に入ってきて、「変なお兄ちゃん来たな」と思ったら「海洋堂さん、海洋堂さん、こんな歌、こんなアニメ知ってはりますか？ばかですよ」とか言いながら、ダイオージャの話をしながらうちにやってくる。うちに飾ってた『2001年宇宙の旅』のディスカバリー号をディーラーズルームでガレージキットとして売りたい。「貸してくれんか」と。ちなみに川口さんというところにしばらく弟子入りにも行かれて。

結局でも岡田斗司夫は、あの当時あんなすごいものはフィギュア化できる、製品ができる、型取りもできるわけもなく、ボロボロに壊して返しにきやがってですね。「コラッ」と岡田斗司夫さんには言いましたけど。

とはいえ1回目の、僕が参加した第3回(?)DAICON3（：1981年、大阪で開催された第

20回日本SF大会。)の時のオープニングアニメを見てびっくりこいて。当時川口さんも一緒にディーラーズルームに出て、なんと筒井康隆さんがタロスを買ってくれたという。そういうただのファンダムの活動をして、そういう初々しい人間であったんですが、2年後の84年のDAICON4の時には、向こうもゼネラルプロダクツというお店を作ってますね。海洋堂とは、ある意味オタクの仁義なき戦いを3年ぐらい、2年ぐらいかな?やってみました。

言うたらオタクの喧嘩というのは、抗争というのは、素晴らしく言うたら相手を罵り合うことなんです。僕らはお互いに向こうの悪口を言い合いながら、ゼネプロはゼネプロで、どこかのSF研究会のふりをしてですね、8ミリビデオを持って、うちらを取材に來たりとかして、僕は喋って、よく店で上映して、笑い者にしたりとか。僕たちは僕たちで彼らが売っているガレージキットのレジンのものとか見て「下手くそやな」って、みんなで全員で置きながら「これゼネプロの怪獣やで」とか言って。「こんなもん売っているのか、あいつら」「本当にバカやで」と言いながら、そういう罵り合いをする正しい抗争をやっていたわけなんですけれども。

84年の終わりに、ゼネプロの岡田、武田(:康廣)が海洋堂にやっけて、「手打ちをしましょう」と。きつとそういうこと(:紛争)を喜んでるのは、東京の雑誌関係とか、こういう編集関係の、例えば「安井さんとか聖さんが仕掛けているんですよ」と言いながらね。僕らの実名を出したら、まあええやろうと思いつながら、今も言ってますけど。そういうことをしていたら、いいことはないやろう。これからガレージキットというものをどんどんと発展させるためには、彼らはSF大会をやっているイベントが得意であるから、ワンフェス(:ワンダーフェスティバル)というのを考えておると、「つきましては手を組んで一緒にやりましょう」という手打ち式をやりまして、84年のワンフェス、そして85年第1回目の浜松町と産貿(さんぼう)(:東京都立産業貿易センター)でのワンダーフェスティバルが誕生することとなり、いよいよガレージキットが世の中に広がっていくということになります。

——元々はワンダーフェスティバルの発想自体はゼネラルプロダクツから。

宮脇:ゼネプロの岡田、武田。あと赤井(:赤井孝美、DAICON3オープニングアニメのメインスタッフやはり後のGAINAX創設メンバーのひとり)くんとやったりだと思いますね。

## ○「ワンダーフェスティバル」のはじまりと発展

——で、岡田さんと一緒にやろうという話になって、徐々に今は海洋堂のイベントという風になっていますけど、どういう関係でそういうふうに移行していったのか。

宮脇:あれは90年でしたかね。最初の冬ワンフェスか、冬だったかな?どっちだったかな?ちょっと調べてもらって。当日ワンフェスの晴海のガメラ館。今はもうみんな知らないけど、どっかで注釈を。ビッグサイトに移る前、日本で一番大きな、メッセでもなく、ビッグサイトでもなく、晴海にある国際見本市会場というところですよ。

そこで大きな会場を1つ使ってワンフェスが開催されたのが90年の時の、当日の朝に岡田斗司夫が僕を招いて「宮脇さん、宮脇さん、どうぞ。とってもいい話があります」と。「何ですか?」「僕らはこれでワンフェスをやめるんですよ」「は?」「つきましては海洋堂さん引き継いでください」と。「いやいや、何を言っているんですか」。当時はその日は、武田さんとか佐藤店長(：佐藤裕紀)は全然知らされてもなく、ある意味クーデター的な、岡田、それから赤井、もう一人誰やったかな?3人ぐらいが、当日の朝に、「君たち、僕たちはこんなもので、言うたらフィギュアでは天下取れないじゃないか」と。当時は赤井さんの『プリンセスメーカー』とか、なんだかんだあってわれわれはこれから発信者になる。アニメを作ったりとかするのに、こういう当日版権というのは、ゼネプロの始めた85年のワンフェスの後、1年ぐらいからかな。86年ぐらいから始まった発明で、バンダイさんが言ったらある意味後ろ盾になって、バンダイの持っているコンテンツ、それこそガンダムまで当日版権で。

——当時はそうでしたよね。

宮脇：そう。小田雅弘のキュベレイとか。あれが87年ぐらいですかね、6年かな。それこそ永野(：永野護。漫画家、デザイナー)さんのところのファイブスター物語で井上さん(：本動画インタビュアーの井上伸一郎のこと)が原稿を取りに来ているところ、僕ら邪魔しに行きながら、永野さんと小田さんのキュベレイを永野版みたいにしなごら「次のSDガンダムはこんなやと」「これは没になった」とか、いろんな話をしながら。某井上さんは編集者だった、編集担当だったんですよ。

——そうですね。

宮脇：僕らはそうやってしながら、そんなことをしている時だったんですけども。とはいえ、彼らが僕らに対して当日版権というものを、これやると結局何が、僕らも今大変なのは、今回のワンフェスなんかでも5,000近い申請があるんですよ。扱っているライセンサーも300近いライセンサーとお話をします。そうすると、そういうところから版権をもらうとなると、何か僕らがエッジの利いたことが問題を起こしたら、ワンダーフェスティバルを参加しているディーラーさんにも迷惑をかけるので、今も海洋堂さんはあまり版権関係のもので暴れられへんということもありまして、ゼネプロさんもそれは考えておられまして。当時はガイナックス(：株式会社ガイナックス)に変わったところだったんですけども。われわれはこれから自分たちがコンテンツを作り上げていく人間が、こういう版権元であったり、声をかけるのもいかんし。当時その前ぐらいにはゼネプロさんも大攻勢をかけて、いろんなカタログを作ったりとか。92年ぐらいかな?89年、90年ぐらいにはすごい大攻勢をフィギュアの中でかけたんですよ。

ところがわれわれはちょうどあの当時もレッドミラーージュの35分の1小田さんのソフトビニールとか、とんでもない。海洋堂さんは、今から考えたあの当時の海洋堂さん

のクオリティというのは、他のガレージキットメーカーよりも群を抜いて、特にこの前ホビージャパンさんが55周年記念で出された、85年かな？当時の復刻版を見ている、うちの『ガリアン（：機甲界ガリアン）』とか、いろんなホビージャパンを賑やかさせている作例記事と、他メーカーとでも、僕らも多少の鼻屑目で見ても圧倒的な海洋堂さんの造形力は、当時は群を抜いておったし、ワンダーフェスティバルでも僕たちは主催というよりは、一番のディーラーでありたい。一番よく売れるし、一番人気があって、一番活躍するし、掃除も手伝うし、イベントの準備と撤収も全部手伝って、一応僕らも一人、一人称としての参加者でおったので。

そういうのを含めて、ゼネプロさんからは「われわれはワンフェスというものを、海洋堂さんに全部タダであげます」と「これまで作った原型から金型からそういうものも全部あげます」「もうだからあとは海洋堂さん、フィギュアの世界、我々の後を引き継いで頑張ってください」という。その当日の朝に言われてですね。何かこれきっと。岡田斗司夫でしょ？おかしいやん。裏があるでってみんな言われながらも「すぐ返事しちゃダメですよ」とかね。周りから結構言われて。ただ僕の中では、本来海洋堂というのは模型造形の会社なので、イベント運営なんか素人なので、そんなところがイベントに対して主催になるというのはやっぱり半分以上はありましたけども、でも岡田斗司夫なり赤井さんなり武田くんなんかも途中から言ってくれましたけど「これもし海洋堂さんやらなかったら、これがあたらボックス（：株式会社ボックス）とかムサシヤ（：MUSASHIYA）がやってどう思いますか？」とか言ったら「あかん」と。

たまたま当時はバンダイさんもB-CLUBと組んで、ワンフェス潰しというか、圧倒的なホビージャパンとバンダイが組んでですね。当然『ガンダム（：機動戦士ガンダム）』と『セーラームーン（：美少女戦士セーラームーン）』の著作権を使って、JAF-CONというジャパン・アート・コンベンション、フェスティバル、そういったものを開催したりとかしてワンフェスを完全に。某、今は亡きKさんが、B-CLUBを主催している人が、一生懸命いかにワンフェスがひどいイベントかであったりとかですね、そういう形でネガティブキャンペーンを打って、ワンフェスに対する対抗をやろうとしていた時もあった。

——対抗のイベントが始まっちゃって。

宮脇：そうなんです。だから、ワンフェス結構逆風も吹きかけてきたし、大丈夫かねってのがあって。とはいえ、やっぱりそうやって言われたら、漢気というか、だから僕らがよく言うのは、海洋堂というのは昔かたぎのヤクザみたいなもんで、縁日を仕切る。ヤクザ言うてもええよね？放送禁止ちゃうよね？そういう場の提供であったり、自由な場所であったり、昔かたぎふうなイベントとしてはできるやろうということで。そういう昔かたぎであるべきというか、ちょっと違う人たちを遊ばすための場の提供はしたいと。そういうイベンターとしてはなかなか力はないが、とはいえゼネプロの意思を継いで、僕は2代目、今ワンフェス実行委員長で、今いろいろとちょっと困ったことになって、ワンフェスの規模が大きくなって、いろいろな組織が出てくると、

僕は目の届かないうちに勝手にいろいろと、イベントをやるとダメなこととしてはルールをどんどん作っていきよるんですよ。

おかげでこの前もいろいろな問題起こし(：トラブルメーカー)が出てきて、僕らはディーラーというか、参加者が、まずはお客様よりも、一番の大事なところはディーラーでやるから、参加する、造形する人たち。ものづくりのイベントなので、それが僕が目の黒いうちはゼネプロイズム。ガイナックスイズムを引き継いで、ワンフェスは僕が実行委員長という形で、今は海洋堂から一步距離を置くけど、これに関しては代表として睨みきかすでというのが、このイベントを末永くするため。

とはいえ、やっぱり最初ライブハウスから始めたイベントがよくあるように、街の大ホールとか使って、今は(：東京?)ドームとかそういうイベントになると、ルールはお客さんもどんどん増えてくるし、他のイベント、つまりワンフェスに対抗するいろんな野合したイベントがいっぱい出てきたんですよ。夏場に同じような。某 KADOKAWA (：株式会社 KADOKAWA) さんもメディアワークス (：株式会社メディアワークス) と組んでいていろいろあったよというのがありました。あれが面白いのが、ある時はバンダイとホビージャパン。途中からバンダイはホビージャパンを裏切って、今度はメディアワークスとイベントをやったり。今度はまたホビージャパンと組んで、いろんなメーカーがやっている。まだ今年、最近 C3 ないよねと思ながらも言うたらあかんけど、これは切られるかもしれないが。そうやってワンフェスというものはできるだけルール化された、そういう販売、広告代理店がやるイベントじゃないイベントとして僕はまだ続けていきたいと思っているので、それが今のワンフェスを引き継いだ海洋堂という、私が一応まだ王様として、あの場ではある意味独裁者じゃないと、民主共和国とか民主主義ではああいうイベントは面白くないものに、(：なる)みんな全員が OK を出すようなところでは共和国はダメだろうというので。一応僕はまだまだある意味良い独裁者として君臨。王様や。独裁者も言うたらダメですね。王様として、国王として君臨していきたいと思っています。

## ○模型への視線

—なるほど。それでゼネプロからそういう提案があったのは私も初耳だと思っています。当時、ゼネラルプロダクツさんが作っているのは、やっぱり SF ものというか、そっちがメインだったかなというような。あとはアニメですかね、ご自分たちが作られている。そういう作品が多かった。海洋堂はやっぱり出自がそうだから模型ジャンルというか。模型ジャンルというのはおかしいけど模型を作っていくという。

宮脇：そう。どちらかというと生ものですね。僕らがやっているフィギュアというのは絵画的要素のある模型なんです。だからそれこそジェットビートルでも、それこそ庵野秀明が描いたジェット、絵だけでも全然違うじゃないですか。赤井さんが描いたジェットビートル(：マッドアロー1号の言い間違い?)も、庵野秀明も河森正治も、ビートルを描いたら全員がジェットビートル違うでしょ。ホークも違うでしょう。だから僕らはそういう造形作家の、海洋堂が目指すのは原型製作者の名前が入った作品を、例えば原詠人が作ったネロンガやゴロザウルスですとか。

ゴジラは僕ら、全部イノウエアーツから最初作った井上（：井上雅夫）さんのゴジラ、原（：原詠人）さんのゴジラ、酒井ゆうじのゴジラ。そうやって作家のものとしてやっていた。ゼネプロさんは素晴らしいのは、彼らはパッケージとかすごいデザインでやったりとか、中身よりもまずは製品とプロダクトと。だから本当にゼネラルプロダクトなんですよ。彼らにとっては海洋堂は芋臭い、ダッサイ。ただ原型使って、そのままシリコンで型取って、昔はだからひどいのは爪とか牙がないの当たり前で、「自分でアルミ線で作れ」とか。作ったら即、原型が納品されたら1週間後には商品が出ているぐらいの。元禄模型とか、岡田斗司夫がいつも「元禄寿司みたいな、回転寿司みたいな、作って手作りで目の前で作っているんです、あいつら」とか言ってバカにされながら。彼はマspro、プロダクトとしての素晴らしい説明。それこそ赤井さんなり庵野さんなり、いろんな人が★★さんなり。すごいいくできたパッケージが売りであったし。僕らは原型製作者。今は原型師と呼ばれていますが、僕らは造形作家の、造形師の原型製作者が偉いんやというのが海洋堂のやり方だったので。

特に当時は90年代ぐらいは、80年代終わりからは、それこそBOMEさんという、あとで出てきますけど、彼なんかはもう、彼のでっかいフィギュアを1時間で3,000万円売り上がるわけですよ。1個例えば2万5千円ぐらいとか3万円ぐらいのものが、だいたい100個、150個用意しますと。となると1種売るだけで400万ぐらいが、もう1時間で売れる。それが6種類ぐらいあったら6種、2,400万、もうちょっと8種類ぐらい作る時もあるって、それこそ和田慎二さんとか新谷かおるさんあたりがですね、会場前にみんなもう10個ぐらいを束にして買ってくれてるわけですよ。

そういうものを続けて、海洋堂はもう美少女フィギュアをある意味設計して。ロゴもロゴで、完璧な仕上がりとしては僕らがある意味、金字塔を出したのは永野護さんの『ファイブスター（：ファイブスター物語）』、小田さんの35分の1レッドミラージュというものを、当時あのワンフェスだけでも500個ぐらいすぐ売れてるぐらいのものを売ってましたから。キューベレイでも200個ぐらい限定とか。メカであろうが、でもレッドミラージュは永野護であり、小田雅弘のレッドミラージュだし。

——名前がちゃんと全部出て。

宮脇：全部キューベレイも小田雅弘やろ。特に今では小田雅弘というのも誰も知らんやろうけど、当時は神ですからね、小田さんはね。今の人間は小田さん知らんやろうっていうのは。川口克己も最近、ちょっと最近元気なくなって、「表に川口名人ももっと出ろっ」というのがありますけど。ストリームベース、小田雅弘から始まる。これはまた欄外（：コミックボンボンなど雑誌媒体で有名だったモデラーユニット）で調べてもらわなあかんが。ガンプラを言うたら、今あるのは彼らのストリームベースのおかげの部分も大きいですからね。

——漫画キャラにもなりましたね。

宮脇：そうですね。『コミックボンボン』を見ながら84、5年に。当時、84年、5年

に安井尚志さんという原作者が仕掛けて。ボンボンという雑誌全体を使って MSV とか。僕らの、イノウエアーツのダンバイン（：聖戦士ダンバイン）を作らせたりとか。僕らは僕らでいろんな怪獣とか恐竜とか、ロボット。小学校、ここだから海洋堂のホビー館というサティアンは、当時 85 年はもう全国からそういうボンボンを見た小学生の理想郷やったので。北海道から横浜からみんな子供さんが来てた。当時の 84、5 年ガレージキットを始めた頃の子供さんってみんな早熟な子が多くて、中学生でもみんな頑張ってる、高いガレージキット、2,000 円、3,000 円するものを買いに来るわけですよ。東京のさっき言った海洋堂ギャラリーなんかの方でも BOME なんかも店員やってましたけど、それこそ近所の関智一という某声優もですね、足繁く通って BOME さんから教を乞いで施されて、フィギュアを作っていた中学生だったりとかして。なかなか当時の盛り上がりぶりというか、85 年あたりの世の中のオタクに対する、あれはまた氷川さんあたりに書いていただきたいが、アニメバブルというか。

それこそ今は全部潰れてしまったエルエスであろうが日東（：日東科学教材株式会社）であろうが学研（：株式会社学研ホールディングス）であろうが、タカラトミーも撤退したし。他にもマークやらなんやかんやと、テレビアニメと合体して、それこそオーガス（：「超時空世紀オーガス」の権利を）各メーカーが今グッスマ（：株式会社グッドスマイルカンパニー）とマックス（：株式会社マックスファクトリー）さんが取り合っているような 80 年代アニメバブル時代のロボットアニメの盛り上がりからですね。あの時の全部が狂っていた、84、5 年あたりは。検証していただきたいと思いますが。海洋堂がガレージキットを始め、そしてワンフェスが始まる 85 年、86 年の頃の。ちょうど今井科学が 2 回目の倒産したのも冬ワンフェスだったんですよ。

岡田斗司夫が僕の目の前にやってきて「宮脇さん、宮脇さん、知ってますか？最新ニュースですよ」「どうしたの？」「今井が潰れやがってね」とか言って「はあー」と。今井 2 回目潰れた時は。アートミック（：有限会社アートミック）関係でいろいろテレビアニメで失敗してオーガスとか、あの辺の辺りで。あれが最後ですかね、最後ですよ。あれでもうとどめを打たれて。最近まだプラモ出てるけど。そういうことがあったりとかする。85、6 年の異常なまでの祭り感は一ワンフェスからのそういう世の中のおタクが盛り上がった頃。

別にその当時は割と『ガンダム』そんなに人気なくて MSV（：モビルスーツバリエーション）ぐらいしかなかったんですよ。だから当時は『ダンバイン（：聖戦士ダンバイン）』やってたりとか、そのあとなんやったっけ？なんかあった？

——『エルガイム（：重戦機エルガイム）』。

宮脇：ちょうどそう。『エルガイム』。『Z（：機動戦士 Z ガンダム）』出てくるちょっと前。『Z』が出た頃ぐらいですかね。

——85 年です。

宮脇：ですよ。ちょうどその頃は『ニュータイプ（：月刊ニュータイプ）』が創刊

の時じゃないですか。全部がそういうニュータイプの創刊もそうだし、ワンフェスの始まりも。だからある意味 85 年というのはちょっと異常な。来年そういう意味ではニュータイプですとか 40 周年じゃないですか。

——そうなんですよ。

宮脇：すごいですよね。いろんなものが一緒にくっついた異常な熱気があって、渦が巻いて、いろんな歯車が重なった時代ですよ。

——逆に言うとアニメファンがですね。ファンっておかしいですけど、いわゆる第一オタク世代が持っていた特撮、これは氷川さんが持論で語っていらっしゃるんですけど、特撮もアニメもそういうものがね。例えば人形劇もそうですけど、全部昔の子供は一緒だったものが、逆にそのくらいになって。アニメファンとか特撮ファンとか。

——80 年代に別れちゃうんです。

——別れちゃうんですけど、逆に言うとフィギュアの世界っていうか。海洋堂的世界では全部そこが。

——立体物の世界では全部仲良くやってる。

宮脇：全部がくっついて、特撮からアニメから美少女から、それこそロボットから、怪獣からヒーローから、全部。あと竹谷(: 隆之)さん的には化け物、クリーチャーですよ。そういったものがワンフェスという会場では本当にみんなが集まる。今もそうですけど、あの集合体は何なんでしょうね。

——そういういろんなジャンルが立体物に出てくると同居するユートピア(: になる)。

宮脇：そうですね。そういう意味では別れることもなく、コミケとかとは違って。確かにコミケは何十万人、60 万人。十倍くらいの、それこそワンフェスなんかの規模がある。確かに書店と模型屋さんの量の違いなんでしょうけども、ああいう中でみんな同じオタクの世界でコミックだけとか。美少女も作るけど、アニメも好き、怪獣も好きだしというのは当たり前で垣根はないですね。

——★肉とは分かれてるんですよ。漫画と特撮。

宮脇：分かれてますよね。分けてたら同じディーラーでも 2 つ、3 つ作ってやってるし。一緒になってやっているというのは面白いですよ。

——だから立体というかフィギュアの世界では、まだそこが一緒の文化というのは。

宮脇：これからもそれが変わることはなかなかないでしょうね。そこは僕にとってもフィギュアというもの、模型の世界、造形の世界というのは。今はだいぶデジタルのおかげで急激にまた変わってくるでしょうけど、結局、ものを作るとなるとプラ板（：プラスチック板）、ポリパテ（：ポリエステルパテ）。昔からは第一世代、みんなプラスチックの板とかポリパテでそこにファンドという紙粘土があったりとか、いろんなマテリアルを作って、原型を作って。そこからそれをシリコンで型取って、レジンで複製するという、すごいプロセスが。大変なんですよ。

だからそのためには、模型を作る、造形するという大きなハードルを超えるためには、結構同じような戦友意識がみんな模型に対してはあるんですよ。苦労するから。手軽にはできないし、というのはありますよね。うちのゼネプロとの違いがよく分かるように、模型を作るのに、別にね、そう考えると、言い方を考えないといけないけど、みんなね、才能、能力、そんなにないんですよ。ゼネプロなんか見てると、今もみんな、言ったらああいう作家のアニメーターの監督とか、絵描きの人とか、なんやかんやは、お互いにみんな自分で作家力が強いからか、大体バラバラになります。仲良くない。仲悪い人多いですよねと。そこは、ゼネプロさんが現にそういったガイナックスになり、庵野さんがいたりとかするが、他の作家もいろんな人がいらっしやるけど、そういう中では、一緒のものはなかなかできないというのは、やっぱりそれぞれの作家力の違い、造形師はやっぱり、模型作家というのは、造形はあくまでそういうキャラがあって、それを立体で形にするので。竹谷さん（：竹谷隆之）みたいなオリジナル造形作家はなかなかいないけども。とはいえ、そういう元のファン活動の一環なので、何でもありみたいなものが模型に関しては、造形に関しては、「ゴジラが好きです」とかね。そういうのはありますよね。

ただ、僕としてはこれもまとめになるんだろうけど悲しいのは、そういう今はもうまたコンテンツ、IP が強くなって、本来は造形作家主義であったはずのこの模型の世界、造形作品、フィギュアの世界が今やもう権利元様が、IP 元様が偉い。もう、K 川さんなんかもそうだし、K 談社さん、K 談社さんは割とええよな。S 英社なんかとか、S 学館さんなんかはなかなか大変だけど。本当に監修という名目でメーカーもそうだけど、作家の名前をまず出してるのはうちしかあんまりいないんですよ。造形作家の名前、つまり原型製作者。原型師と呼ばれる人の名前を入れると、当然その人に権利が出てくるから。

例えば原型制作を頼んだ人が後々原型制作者の名前が入っていると、そのメーカーを嫌いになったりすると、「この模型を出さないでくれ」とか。当然、著作権者人格権というものもあるわけですが、それを認めている会社はなかなか少ないですよ。というか、そんな面倒くさいことはしたくないので、海洋堂さんだけは造形師、原型制作者、原型師の名前を全部に入れるのが、これはもう当たり前だというのがうちの考えですけど、「他のメーカー、みんな悔しかったら出してみろ」とか言って。イラストレーターとか絵師の人はみんな名前を書くじゃないですか。それこそ開田裕治であり、ゴジラを描いてもいろんな。西川（：西川伸司）さんであったりとか、いろんな怪獣絵

師がいる。パッケージを描くのは、それは昔から高荷義之なりとか、生頼（：生頼範義）さんから何から全部いらっしゃるわけですけど、造形師に関しては名前が出ているのは、使うのは、本当にメーカーが使うのは竹谷さんぐらいなものかねってぐらいのものですよね。それがワンフェスで本来その場であったものが今やフィギュアというものは、ちょっとライセンサー様の、言ったらグッズの一環に落ちぶれてしまっているのはちょっと残念ではありますね。困ったものですね。

今また最近、K川さんがすごい勢いでプラモやったりとか、メーカーになろうとしてますけど、別の部署でしょうから。

## ○「ワンダーフェスティバル」の当日著作権システムと40周年

——あとすみません、ちょっと確認させていただきたいのですが、先ほどワンフェスにおける当日著作権の、このアイデアは、ということは、ゼネプロさんなんですか？

宮脇：ゼネプロさんですね。完全にゼネプロさんがこれは公でも財でもあるんだけど、彼らも言うんだけど、そうやってしまったおかげでコミケじゃなくなっちゃったんですよ。コミケなんかやりたい放題だし、普通のキャラクターをすっぽんぽんにするわ、まぐわるわ、ろくなことしてないのに、あれがOKでなんでワンフェスはあかんねんというのがあります。とりあえず、やはりゼネプロさんもそうだし、そこに後ろ盾になってくれたバンダイさんであったり、海洋堂さんも模型メーカーだし。

当時、僕らも結構他のメーカーから、今はもうないツクダホビー（：株式会社ツクダホビー）とか言うんですね。今は某バンダイさんの中の一角になってますけど、あそこあたりが僕らをね、もう著作権元とか言って、「あいつら取り締まってくれ」という。メーカーがフィギュアメーカーというか、ツクダのところに代表するようなメーカーさんが潰れてるから言ってもいいだろうけどね。うちのことに對して文句を言ったりとか、そういう機運も出てきたんですよ。ちょうど当時は『B-CLUB』というバンダイさんの出してる雑誌が、「じゃあ後ろ盾になってワンフェス応援しますよ」。あの時一緒になってやっていただけ。だからそれこそ本当にバンダイが持っている東映、東宝、円谷プロ。それからガンダムまでワンフェスでできた。それは素晴らしい。それは魅力的なことで。ちょうど彼らとのコラボでバンダイさんが応援してくれたのですね。素晴らしいバンダイ当時の格好。その背景はゼネプロの『1982 おたくのビデオ』にもいろいろとその後、某Kさんによく似た人が出てきて乗っ取ろうとしてますけれども。それが当時は蜜月時代であったのですね。

——まだ混沌としていた時代では。

宮脇：混沌で。本当にいろんなものが、それこそカンブリアビッグバンみたいにいるんなセルがくっついたり合体したりとかして、本当にそれは誰かが考えたわけでもなく自然発生であり、そこに別件ではあるけど盛り上がるバンダイさんを後ろで応援して。静岡のバンダイと東京のバンダイがあって、静岡バンダイあたりがどんどんそういうのを、模型情報をB-CLUBで盛り上げ、そこには今でも誰かに検証していただき

いのは安井尚志さんという完全な裏の仕掛け人が。僕らは宮脇さん踊らせ、毎月毎月僕東京行って、講談社（：株式会社講談社）のボンボンのスタジオでみんなそういう業界人が集まって話をして。ちょうど永野護なんかもそういうところを始める。リック・ドムとか絵を描きながら川村万梨阿さん（：声優。永野護の妻）とスタジオにも来てたりとかしてました。始まるまだ前でしたけどね。そういう様々な裏で仕掛けをする安井さんという仕掛け人がおったわけで、僕らもそれに乗せられて。

やっぱりそういういろんなものは人の力であったりとか、あとはいろんな人たちの思惑であったり、勝手に動くものであったり、時代の流れというのはそういうのを全部いろんな要素を入れていると面白いですよ。85年は確かに40年。そうか来年は異常なまでの年じゃ。

——ちょっと40周年企画を。

宮脇：いろいろとそういうのは。ワンフェスも来年だから40周年なんですよ。今日うちらも、やっぱり海洋堂さんがこうやって取材されて、最近僕もこの前までちょっと特にハマってた『フリーレン（：葬送のフリーレン）』あるじゃないですか。『フリーレン』なんか見てたら「私は一千年生きた魔女じゃ」というところで。

——気持ちがそっちに。

宮脇：そう。「お前ら500年やろう」と。海洋堂さんはこの業界60年やってるんじゃないということで、ずっと生き残って。氷川さんなりで、もう何年目ぐらいですか？この業界で。もうだいぶ長いですよ。

——そうですね。

宮脇：40年ぐらい。

——中抜けしてるんで、私は。ここはいいですけど。

宮脇：はい。そういうもので海洋堂って結局、海洋堂さんが今ブランドで、僕も海洋堂をある意味、事業継承した形でM&Aで資本は別になってますけど。僕なんかもずっと言い続けたのは、「宮脇というものがおらんようになったら海洋堂終わりじゃ」というのは、海洋堂的なもの。つまりこの異常なまでの王様がいなくなってしまうわけですから。ただ、そのブランドとしては、残していかないかんだろうし、ワンフェスであり、あとあとの人たちにいい形でそれを続けていただきたい。

最近特につくづく思うのは、結局、この前パリ五輪があったりとかしました。でもやっぱりフランスのパリがすごいのはヘリテージングというレガシーがいっぱいあるじゃないですか。それこそ凱旋門であろうがヴェルサイユであろうがルーブル（：ルーヴル美術館。ヴェルサイユ同様建物は元々宮殿）であろうが、そういうものがある。

日本だって、日本で今、観光でどんどん来てるけど、みんなが見に行くのは京都であったり、奈良であったり、東京でも浅草、富士山。あくまでそういう歴史文化があるところ。ヘリテージングであり、レガシーがないとこういう世界って続かないじゃない。海洋堂さんがやっぱり海洋堂としてこれだけいろんなものを僕らは狂ったぐらい。あるときは妖怪であり、怪獣であり、パブリックドメインを山のように動物をやったりとか。それを自分たちはそういうレガシー的なヘリテージになりたいというか、伝統を作っていかなければいかんなどというその気持ちは結構ね。

うちの館長が素晴らしいのは、だから後でまた引っ張り出しますが、64年創業の時からうちが海洋堂とか他と違うのは、全部ね、活字に残しているんです。オデラミキちゃんのところに行って、今上で片付けてるけど、当時の昔が出てきた印刷物箱があるので、館長が書いたPR誌箱があるんですよ。うちの館長って、やっぱり物書きだったので、海洋堂が他と違うのは、自分が小説の主人公なんです、あの人。正義の味方じゃないとあかんし、悪いことはできないし、自分が物を書くための主人公で。それは海洋堂イズムってのを、今僕もそうやって一人称で結構語ったりできるというのが自分の中での、それを特にただ喋ってるだけではなく、うちの父は本当に活字が大好きな、活字として海洋堂は残すというものがうちの特徴であり、最初の創業時からそうやって作り続けた。そういうPR誌というか、同人が、海洋堂がメーカーにも他のメーカー、「タミヤニュースを作るのもうちで見てからだからな」って言いながらね。それこそ、タミヤさんであれがもっと前から。いち小売店が、そういう自分たちのPR雑誌、啓蒙誌を作って。

——メディアを持っていたんですね。

宮脇：そう。自分がメディアになって、自分が発信者にならなければいけないというのが海洋堂の。記録を残すというのは、やっぱり文章に残すというのは良いことですよね。発言だけでは今やったらすぐ消えてしまったり、映像も残ったりするけど、本当に文章は素晴らしいという。極めて割と文学的経営をやっていたうちのお父ちゃんというのが、海洋堂の変なスローガンという。今はコンセプトですけど、当時の作家の人はみんなそういうのがあったりとかするので、スローガン大好きなんです。作戦名でやったり、作ったりとかね、いろんなもので自分で書いて手書きにして。それこそガリ版刷った時代から利益をことごとく、83年も84年もずっとうち貧乏なのは、基本的に物を作るとすぐに本を作りやがるんですよ。「ARTPLA」とかですね。出版物を作って、莫大なお金、5,000部単位の本を作ってどうすんねんという形のことをやっていました。だからそういう海洋堂の売り方というのは、そのBOMEさんなりなんなり、それはこの時代からうちのお客さんではあるけれども、独特の空気感がある模型屋さんだったのですね。

——やっぱりストーリーがありますよね。今話を全部伺っていったね。バックボーン。

## ○フィギュア文化への視線

——今日のテーマは、フィギュアを中心とした文化にどうして海洋堂さんはなれたかというのは、秘密が一端がそういうところの。

宮脇：そういうところで、他と違う。僕らはもう、あともう一つはコンセプトメーカーでありたいというのは、今のグッスマさんの安藝（：安藝貴範）さんもそうだし、どこだってみんな正しいメーカーは、『少年ジャンプ（：週刊少年ジャンプ）』方式で「皆さん何が欲しいですか、作ってあげますよ」。アンケートを取って、ジャンプ方式。戦法。これは確実じゃないですか。海洋堂さんが素晴らしいところは、チョコエッグという、たまたま99年の9月。これが僕らにとっては食玩革命とフィギュア革命になるわけですけども、そこで日本の動物コレクションというものが爆発的に売れたんですよ。それも3年間で1億3,000万個と。だから今、海洋堂、ビルも建ったし、こうやっているなところで話ができる。

だから、KADOKAWAさんと前お話したときも、僕らはフィギュアを作りますけど、でもそのフィギュアだけじゃなくて、それこそ荒俣（：荒俣宏）さんと妖怪を広げたいんですよ。妖怪人気あるから『ゲゲゲの鬼太郎』を使わせてください、ではいきなり行かず、いきなり鳥山石燕の妖怪の絵から始めて、第2弾目が動物の次は、ジョン・テニエル（：John Tenniel）の『不思議の国のアリス』のイラストからテニエルを広げたい。アリスをするんだけどディズニー（：ウォルト・ディズニー・カンパニー）のアリスなんかではない。次は妖怪だけど鬼太郎ではなく、途中からやりましたよ、最後はね。でも石燕でやりたいし。それは動物でも天然記念物でもなんでも。

妖怪やるときは、あるとき、それこそ京極（：京極夏彦）さんが、京極夏彦世界をやりたいんですけども、それこそ京極さんの流行った頃に、最初うちらがフルタ（：フルタ製菓株式会社）でやった妖怪シリーズというのは、それこそ、狂骨でやったりとか、ぬっぺっぽうでやったりとか。そこに出てきた、産女は作ったかな？ どうやったかなとか、そういうへんのものに完全にリンクした形で。それは乗っかっただけですけど。でもその後から妖怪というものをやりたいから、京極さんと仕事をしたいし、荒俣さんと仕事をしたいから郡司さん（：郡司聡）さんをお願いして、フィギュアというものというよりは、あれはあくまでおまけじゃないと。僕らが目から鱗が落ちたのはチョコエッグやった時に、これは全てのクライアントさんに話すんですけど、これは絶対言うのかなあかんのは、日本人は世界で一番フィギュア嫌いな民族なんですよ。

——そうですか。

宮脇：みんな「へー」と言うでしょ？

——ええ。

宮脇：「嘘でしょ？」って。それというのは、今これだけ大谷翔平さんがいて、じゃあ日本でバンダイが、これ世界のヒーロー、日本一のヒーロー、どこも作らないんで

すよ。キャラクターものであったり、なんだかんだ作ったりとかするけれど、そうは言えども、僕らも最初に中国に行って驚いたのは、チョコエッグは作った前ぐらいから『北斗の拳』であったりとか『デビルマン』とかアクションフィギュアを最初、和製アクションフィギュアってうちやで、というふうに言うのかなあかんねんけど「スポーン(：ブリスターパック封入でリアルな彩色済みでブームに火をつけたアメコミ輸入フィギュア)」見て「やられたー」「しもうた」。じゃあ僕らも何かやり返さんと。でもそんな技術も、中国で作る技術ないとなったら、ちょっとシャレで『北斗の拳』というバイオレンスアクションフィギュア、てへへと言いながらやった『デビルマン』とか。今まで海洋堂あまりやったことのない、でもメリハリがついたクリーチャー的なものでやったんで、最初『北斗の拳』を96年に準備して習いに行ったときに驚いたのは、当時も『スパイダーマン』とか。『アイアンマン』はまだないですけども、向こうのキャラクターが、僕らは1万、2万、3万個売れても、ケンシロウが2万売れて「ドヒャー、すげー」と思ったら横(：の工場のライン)で30万個、50万個。アメリカの「スポーン」であろうが、それこそああいいう『スパイダーマン』であろうが『スーパーマン』であろうが『バットマン』売れてる、作ってるんですよ。「はあ？」って。本当にね、フランクリン・ミント・ジャパンという。フランク・ジャパンじゃない。フランクリン・ミント。アメリカの高額ミニカーとか。そういうのを見てると本当にディズニーランドととしまえんの差ぐらい。こんなに違うのかと。フィギュア、みんな野球選手であろうが、なんであろうが、F1レーサー、向こうは、インディレーサーであろうが、バスケット選手であろうが、みんなフィギュアにするんですよ。僕らイチロー(：鈴木一朗)の頃であつても松井(：松井秀喜)の頃で、今は大谷(：大谷翔平)さんですけど、阪神タイガースファンに毎日甲子園に5万人来ても、岡田監督(：岡田彰布)のフィギュアが誰も買わないんですよ。そういうフィギュアとして、日本人は、それこそ飾りたくない。置く文化はない。

——あれもあるじゃないですかね、家の広さみたいなもの。

宮脇：それもありますけどね。それとあと文化が違うのは、それこそヨーロッパなんかは、ギリシャ、ローマから彫刻文化で。ルネッサンス的なものがあったり、エジプトもそうだし、中国なんかで、東南アジア行っても、ヒンドゥーでもなんでも神様はまぐわっているし。日本は本当に仏像とか、それしかないんですよ。でもそれも誰が、運慶、快慶は知ってるけど、じゃあそれがどうなってるか。本当に日本はアニメ文化の国としては、それこそ百人一首とか、あの時代から。百鬼夜行から、全部ほら二次元の文化でしょ。それこそ信長(：織田信長)、家康(：徳川家康)、秀吉(：豊臣秀吉)から、昔の源頼家(：源頼朝?)から何から。あと戦国の合戦絵巻も、長篠の戦いも、みんな漫画なんですよ。

ところが、ナポレオンでも何でも、シーザーの時代でも、それこそアウステルリッツであろうが、ワーテルローであろうが、もうほんとに戦争映画みたいなパースがついて。だから、それこそルネッサンス。つまりダ・ヴィンチ(：Leonardo da Vinci)の写実絵画。リアル思考は、日本、彫刻というものがなかったですから、室町期の確か

に仏像なんかは迫力があるけども、それ以降どんどん虚勢されてディティールを抑えるというか、日本の引き算文化というのは本当に何が悪いのか知らんが、ひな人形でもあって、それこそ節句人形でもあるじゃないですか。いやいや、あれって期間限定やし。一般商品、一般人が使うわけではなし。一般庶民がフィギュアで遊んでないんですよ。

——セレモニー的なものですよ。

宮脇：そう。根付けがあったでしょうって。いや、根付け使う文化人というか、好事家というのは全人口の零点何パーセントでしょって。こけしとか、あれも江戸の後期ですけど、あれが日本の引き算美学のわかりやすいでしょう。あんなものが日本人に身の丈に合っているのは、実はフィギュアは日本人は、それこそ円谷プロのウルトラマンの怪獣ができるまで化け物の怪物のフィギュアって日本で作られて置かれたことないんですよ。

『なんでも鑑定団』見てると、これは全部話すとどんどん飛ばして言うと、あれ見ているとね、9割以上はおっちゃんじゃないですか、出てくる人。お母さんとか奥さんとか娘にさげすまれながら「お父ちゃん、そのコレクション売れや」って。その「コレクション売れや」も、結局みんな壺であろうが、一輪挿しであろうが、掛け軸であろうが、みんな箱に入れてしまっはるんですよ。それがないと値打ちつけへんでしょ。北原さん（：中島晴之助の誤り？）でも、これ箱があったら 300 万だけど、中身だけだと 10 万くらいだね、になってしまうのは、みんなしまい込むんですよ。

日本人って目減りするとか、減ってしまう。それこそヨーロッパの権力者、メディチ家であろうがなんであろうが、ああやって、飾り付けて権力者は見せてあげるじゃないですか。日本は細川家の秘宝とかね、山内家のなんとかとかで見せへんのですよね。たまにご開帳とか、もっと飾れや権力者というか。だから日本の権力者って豪華絢爛ってありえんのね。そういう日本人の貧しい文化が、ただ二次元だけはさっき言ったように、漫画の世界はすごいですよ。

江戸期でもなんでも、浮世絵でもなんでも、テクニックはすごいけど、リアルが何もなくて、どうよって。みんな漫画でしょ。だから日本のアニメのすごさって、そういうものが、もう DNA で。ただ、フィギュアを作る力は、まあ、宮脇さんなり、海洋堂さんはじめとして、僕らオタクの力で 3 次元を作れるようになったけど、それまでは、それこそよく言うんだけど、ミッキーマウスの耳であろうが、アトム髪の毛であろうが、『あしたのジョー』であっても、それができるようになったのは、わしらのおかげやからね。それまではミッキーのクオリティ低かったからね、アメリカも。僕なんかよく 93 年（：スターウォーズ休眠時代）に『スター・ウォーズ』で、版権。ちょうどあのときアメリカに住んでたからルーカス・バレーというところに住んで、三月ぐらい。そのコテージ借りて、うちのイベント用の恐竜の造形師が住んでたんですけど、そのとき知り合いから紹介されて、『スター・ウォーズ』のエピソード 6、7、8 のときですよ。1、2、3 やったときは、4、5、6 かなんかそうですね。やる前だったんで、ちょうど空白期だったんで、版権取りに行っ、ベイダー（：ダース・ベイ

ダー) とかトルーパー ( : ストームトルーパー) とか、今でこそ当たり前のフィギュアが出てる中で、いや、あの当時、群を抜いて僕しか。うちのフィギュアが初めてメイドインジャパンのスターウォーズの、それまでケナーとか。クズみたいなおもちゃのフィギュアしかなかったものにリアルを入れたの。うちやから。レジンキャストで松村 ( : 松村しのぶ) にチューバッカとかヨーダ作らせて向こうで。

今でも海洋堂さんってアメリカで、結構ビリケンも海洋堂も 83、4 年くらいからずっとゴジラでやったりキングギドラでやったり、ハイクオリティの造形を作って。向こうの、言うたら SFX マン。リック・ベイカー ( : Rick Baker) 、クリス・ウェイラス ( : Christopher James Walas) 、キョオド・ブラザーズ ( : chiodo Brothers) とかそういうものがみんな評価してくれて。それこそスタン・ウィンストン ( : Stan Winston) でも『エイリアン 2』のところでも『ターミネーター』でも行かせてもらったりとかして交流があったのもそのためでもあるんですけど。今のリアルな文化作ったのはうちやからねとか。それちょっとみんなに言うのかなあかんのですよ。

海洋堂さんがなければ恐竜だって。今はリアルな恐竜が当たり前ですけどみんな、この前も中国行っても上海ワンフェス、6 年前からやっていますけど、6 年前くらいからそういう中国の造形する恐竜怪獣がすごいんですよ、向こうは。あった？それ、昔のもの持ってきても。そういったものがね、海洋堂さんのこの圧倒的な身の丈を知らない、ニューヨーク自然史博物館とお付き合いするとか。こっちの貸してくれる？そういったもので、そういうことをしでかす。言うたら本当に身の程知らず感がですね。これ 11 年か、来年か。

## ○休憩中

宮脇 : はい、どうぞ。これがね、最初のやつはどれだったかな？これとか。

——ガリ刷り。

宮脇 : ガリ刷りなんですよ。これはまだ模型を始める前の、これよくこんなのがあったな。古本屋時代、貸本屋時代の。

海洋堂社員 : オープンする前ですね。

宮脇 : ですよ。最初に作った半年間の、半年目のあれってどれだった？これ 11 の。あれがないやん。模型屋をね、半年間やって 10 カ月経ちましたというのが全部こうやってね。これが 67 年の海洋堂の出した出版物ですけど、向こうが宮脇少年。小学校 4 年生。

海洋堂社員 : これは 65 年と書いてあります。

宮脇 : 65 年、1 年目の時ですよ。

——これ 60 年です。

宮脇：それはもう本屋の古本屋、貸本屋の時だ。これバルジ大作戦やった時の。これは★ソルトブアンコ★。ひたすらね、こうやって童話を書いたりとか、うちの店で配るんですよ。模型を買った人にプラモ読本を。何年。最初にね、妹尾がいて、僕もびっくり、知らないものがあって、海洋堂を始めて 10 カ月経ちましたという出版物を初めて僕も見て「妹尾さん、これ大事だ。置いといて」って言ったようなやつがまだ出てきて。これがナンバー三、六、十。帆船模型は大体、売ること自体がおかしいですからね。こんなのばかりで。

これがだから 83 年にこれだけのカタログを作っているという。著作権を取っているのは、ラムちゃんなんか絶対に取っていないしね。ゴジラまでは。この辺はだから全部著作権、ノーチラス号ですよ、いきなり。その後はノーチラスを作り続けているんです。これスティングレイとか取っているわけないしね。1メートルの、ラムダは著作権を取っていました。パイラ人は取ってなくて、これ宇宙船に乗って、ちょっと怒られたやつ。大映（：大映株式会社）さんから。

★『ルパン三世』のお弁当★。この時はもう宮崎駿の僕らは元祖。宮崎さんが、僕も最初に 81 年『カリ城（：ルパン三世 カリオストロの城）』の上映会を梅田東映ホール（：梅田東映会館？）というところでやった時なんか、オートジャイロを上げて持って行って。当時はサインしてもらっただけで、僕らのことは覚えてないでしょうけど、僕もカリ城はリアルタイムでやっている時に見に行くと自慢しているところでもある。だから当時は★★イモクジラヘビとか『さらば愛しきルパン（：さらば愛しきルパンよ）』で小山田真希（：同作のキャラクター）を作ったりとか、ラムダを作ったりとか。『ナウシカ（：風の谷のナウシカ）』もうちは最初に作ったのが海洋堂さんで。そのツクダホビーのクソから、まあそこから恨まれたんですけど。でかいナウシカを作って、それをちょっと参考に。商品化するのに参考にしてくださいと。そのままコピーして、ソフビ（：ソフトビニール製人形）で出しやがって。これは参考ちゃうやろう、ということで、怒鳴り込みに行って、うちの。

——犯罪じゃないですか。

宮脇：そう。そういうことがあったので詫言状を書かせたりとかして。当時の常務に。そういうことをやったりとかして、喧嘩ばかりしてましたけど。でも当たり前のことでごさいます、その時は、昔のそれこそ懐かしい面々が映ってたやつが、聖さんとか、小田さんとか、川口さんとか、小沢勝三とか。ナウシカもいっぱい作ってたよ。最初にだからナウシカ世界も蟲遣いとか。これだけ著作権取って、その後蟲遣いとクロトアと、あれもそうですよね。お茶も、なんか飲み物も出してもらって。コーヒーがないじゃないか。これ恐竜ばかりやん。

これが成田さんと蜜月時代で、成田亨さんはうちのマークも作ってくれて。ひょんなことで安居（：安居智博？）さんの紹介で成田さんが六本木か何かで、当時渡辺（：渡辺裕）さんが成田さんをどんどんフィーチャーする宇宙船でも、成田と高山良策さ

んの造形日誌を連載していた頃で。

——私それ行きましたよ。六本木。

宮脇：成田さんとも深く付き合っ引越しの手伝いとか、イベント手伝いとかして、3年ぐらいは蜜月どころかべったりやあって、毎日のように円谷プロの悪口を聞き、いかに円谷英二がひどい人間であったかというエピソードを聞き、僕らはもう円谷さんに対するイメージがグルグルグルっと崩れて「えー、そうやったのか」という。成田亨、あの時はもう円谷プロに対する恨み節はすごいのですよ。

——あの頃はそうだったですね。亡くなるまで。

宮脇：亡くなるまでずっと延々と恨みを語りながら、僕らもずっとお世話しながらね、お話ししながら。酒を飲むのは焼酎好きでね、酒ばかり飲んで。恨み節を延々と言ってはるのですよ。それこそ最近庵野秀明のために、円谷プロと成田くんの和解を仕掛けているけど、完全にやっぱりできていなくて。僕たちも成田怪獣を作りたい。成田さんのデザインを高山さんが作ったらあんなったけど、僕らは成田デザインを別の松村が作ったりとか、香川（：香川雅彦）くんが作ったら、ダダはどうなるんだとか、やりたい。海洋堂は本当に説教臭い会社でございまして。

——これはワンダーフェス。

宮脇：そう。ワンフェス。昔の。結構、あちこちで他のものがどんどん出てくるんですけど、たまたまこのガリ版が大量に出てきて、これとか。お父ちゃんが困ったもので。ただ96で、今病院にちょっとこの前、足を折って入院しちゃったので、まだ生きている。

——お元気で。

宮脇：まだ元気なんです。放っとくと大暴れするからちょっと困っているんで、ちょうど足を折ってくれて静かにしているから。

——高知の方にはもう行かれていないんですか。

宮脇：高知は行く途中で、先月に行ったり来たりしてまして。行く時にちょっと車椅子で元気に自分で走り回っていたら、ちょっとうちのスタッフが目を離した隙にダウンと走って、そのままガタンと車道に落ちて。ガタンと落ちちゃったそうなんですって。まだでも生きています。あんなお父ちゃんが96でなくても、まだ元気な。息子は大変ですよ。本当にね、修一坊ちゃんは大変なので。

業界関係は何かされておられるんですか？

——業界関係はもうだいぶ後輩に譲ってしまったので、僕が具体的に何かやることはあんまりないですけど。

宮脇：そうですか。最近、荒俣さんは大人になりましたね。

——そうですね。

宮脇：なんで出てこないんだろう？一時、荒俣さんね、いろんな活躍をされてたけど。

——そうですね。最近はテレビでも見ないし。

——僕も、もう2年くらい会ってないかな。

宮脇：もうだいぶ会ってないですね。コロナ前かもっと前からか、ちょっと会ってないし。

——荒俣さん、でも、元気だと思いますよ。倒れたとかなんて聞いたことない。

宮脇：聞いてないですからね。そうですね。最近もう年寄りが、さっき出た名前が出てなくて。あ、京極さんか。まだまだ書かれていますよね。

——京極さんは時々会いますけど。

宮脇：水木さんとかもね、★ハラグチ★さんもなかなかお元気で★★出て。

——だいぶ変わりましたがね。

宮脇：最近僕らも、次はまたいろいろと。もういい加減、日本のキャラクター、もういいやーっていうのがあって。どうでしょうね。もうさすがにね、新しいものをどんどん追いかけるのが。でも KADOKAWA さん、今すごい勢いで、やめときゃいいのに、みんな、アニプレックス（：株式会社アニプレックス）もそうだし、この前、昔からそうだけど、みんな著作権料が、集英社プロ（：株式会社小学館集英社プロダクション）もそうなんですけど著作権料が莫大に入るじゃないですか。そうなるこの著作権料で、じゃあ、これ自分らがやったらもっと儲かると思いはるんですよ。いろんな商品に手を出して、みんな失敗して撤退して、アニメもやめちゃったねとかね。KADOKAWA さんも大変だけどね、頑張って、中国でも出てるけど、もっと成功してなあかんけど、なかなか。

このフィギュアの世界って本当にね、ややこしいというか。なんか妙な、なんでしょ

うかね。うまいこといかないとだめなので。グッスマの安藝さんでやったりとか。グッスマさんみたいにうまく。バンダイさんも現場がすごい勢いで変わるじゃないですか。

——安藝さんのところもだいたい中国で、あそこまで行くまですごいなされた。

宮脇：はい。ですけど、今まだまだ、まだまだ。経営者としては本当にね、安藝さん、この10年ちょっとぐらいであんだけすごい会社になって。僕らとは全く。すごくいい信頼関係はあるんで、安藝さんには僕もいろんな形で信用できたりとかするが、ただ商売は素晴らしい。商売センスというか、模型もアニメも好きじゃないくせに、レーシングカー好きなくせに、ふんぷんと思いつながら。

### ○「チョコエッグ」の開発と食玩の発展

——チョコエッグから始まる食玩ブームみたいな流れを。もう一回再開しますね。先ほども少し話に出ましたけれども、まずフルタさんと組んで、チョコエッグというちょっと画期的な発明というか、商品が出たんですが、このきっかけっていうのはそもそもどういふところから始まったのでしょうか。

宮脇：海洋堂のやり方っていうのは、ある意味パクリというか、「こんなひどいものがなかったら僕らがやり出そうじゃないか」というのが、プラモからガレージキット。つまりキャラクターもので、恐竜とか素晴らしいメーカーが作ってくれなければ、僕たちが自分で作り出そうじゃないかというのが、ガレージキットスピリッツなんですよ。欲しいものは僕らがやると。

たまたま96年の終わりから中国へ行ったときに、アクションフィギュア。『北斗の拳』でやったりとか、『タイガーマスク』とか。それこそ『デビルマン』を作って、初めて。ちょうどその前に『エヴァンゲリオン（：新世紀エヴァンゲリオン）』がドカーンと爆発して『ときめきメモリアル』で僕らもそういうフィギュアをやった。ある意味レジンキャストキットもそれまで何百だったものが、それこそエヴァだったら5,000個、8,000個。ガレージキットがバカみたいに売れて、各メーカー、結構お金も僕らもちよっと入って。じゃあ次は金型作って、それもたまたま「スプーン」という、90年代半ばぐらいから日本に入り出した、僕らがやったドライブラシ、墨入れ、そういったものを取り入れたアクションフィギュアが出たことで、「これはえらいこっちゃ」と。僕らも何かしら負けるわけにいかんから対抗しなければいけないということで、ひょんなところから中国について行くことになって試してみたら、僕らのアクションフィギュア。まあまあおかげさまでヒットして、毎月のように行っているんですね、同じ中国って世界のフィギュア工場なので、それこそ隣ではマテル（：Mattel, Inc.）の『スパイダーマン』。当時は『スパイダーマン』もあったかな。『バットマン』とかが、日本の1万、2万個売れたら大ヒットの横で30万個、50万個作っているのを見ながら「へー」って。「アメリカすげー」と思っていたら、同じ工場ですべてこれくらいのカプセルに入った、それこそ卵型の中に入れる小さなカプセルに入った、その

時、ヤーウィ (: Yowie) というオーストラリアの動物のフィギュアのセットを作っているんですが、イタリアのフェレロ (: Ferrero S.p.A) というお菓子の会社で。そう  
いったもので、黒板を見ていると、製造数を見ていると 30 万個、50 万個、80 万個、  
「すごいなこれ。これ何なの」と言ったら、チョコレート型のお菓子に入れるフィギ  
ュアであると。これ動物。これはイタリアの、なんか面白仕掛けみたいなものとか、  
くだらん一つて、というのを見ながらね。

ちょうどその頃、フルタ製菓という会社と、トミーさんの紹介で、フルタがサブライ  
センスをもらって『ポケモン (: ポケットモンスター)』をやったんですけど、  
『ポケモン』を作るのが、原型を作るのが下手で監修が全然通らんと。「海洋堂さん  
にちょっと作ってあげてください」ということを頼まれて。僕らはポケモンの可愛ら  
しいピカチュウであったり、よくできたものを収めていたら、たまたま当時の常務の  
古田豊彦さんと話しているときに、「中国に行ったらこんなを見たけれども、これ  
知っている」ということで。

当時はチョコエッグは日本のフィギュアでしたから、ヤーウィとかキンダーサプライ  
ズ (: Kinder Surprise) という、向こうの卵型チョコ。今でもソニプラ (: ソニープ  
ラザ 現在はプラザ) でも売っていますけれども、そういったものを見て、これを見  
せたんですよ。ちょうどたまたま、本当に同じ時期に偶然に日本でそれを輸入して販  
売して、日本でも何か作ろうとしているということに向こうからも話があって。とは  
いえフルタ製菓というのは、大手メーカー、チョコレートを、お菓子出している巨大  
メーカーからすると、まだまだ規模は小さかったので強力なライセンスが取れないと。  
そしたらということ。

——版權代が。

宮脇：版權料というか、版權なんか取れない。言うたら契約させてもらえんというこ  
とがあって、「じゃあ、ええ方法があります。うちらは、それこそ、オーストラリア  
とか、そんなんでも動物売れてるそうですよ。僕らも、ちょうどたまたま松村しのぶ  
という、すごい世界一の動物造形作家がいます。僕らは動物は全然人気がないので売  
れへんのですけども、今度フルタさんやったという形で、最低数量が、16 万 6,000 個  
やったかな。その 1 回の作る量がね、お菓子のおまけで。それぐらいやったら、原型  
作るのに 20 個ぐらいはいるでしょうから、僕たちはもう手弁当でフィギュアの原型作  
ります。

松村という造形師がおるので、動物をテーマにしたものをやりませんか。動物だつた  
ら、例えば小学校一学年、40 人おったら、5 人ぐらいは清く正しい体育会生活で運動  
場で遊ぶとかそういうのがおるけど、3、4 人、5 人ぐらいは校庭の裏で石めくって  
いじいと虫触ったりとかですわ、動物好きなやつおりますよと。動物好きはひよっ  
したらおるんちゃいますか。動物はライセンス料いりませんよ。でもこれに関しては  
僕らに対して成功報酬としていくら売れなくてもいいから 3 パーセントください。必  
ずマルシー (: (C) 著作権表示)、海洋堂という名前と造形作家松村しのぶも入れてく  
ださい」。

本当に偶然にね、それで向こうも「じゃあやってみましょうか」ということで、99年の9月に発売したら、いきなり最初の月に60万個売れたんですよ、注文が来て。で、翌月には100万個ですわ。「はあ？って、動物ですよ」ってね。僕らも絶対動物なんか売れるとは思わなかったものが。

——思ってたっしやらなかったんですか。

宮脇：全然売れるわけ（：売れるわけない？）。それまで松村しのぶが87年に海洋堂に入った時、ちょうどファイブスターブームの時で、うちが、「もうわしはもうこのロボのおかげで飯食わしてもらはんす」というぐらいの名言を述べてずっと『ホビージャパン』の動物の連載とか、いろんな博物館の。それとかミュージアムの仕事です。いろんなニューヨーク、それこそ自然史博物館とか、いろんな福井の恐竜の出たところで作ったりとかして。

動物造形はするんですけど、博物館の仕事ってみんなものづくりの現場ってみんな今でも造形屋さんって貧乏なんですよ。もう3Kどころか4K。臭いわ、汚いわ、危険やわ、格好悪いわ。そういうとんでもない。現場も今は造形学校出て、造形屋さんなんてみんな厳しい仕事しかできてない中では、そういう中で僕らもそれこそ現場の仕事としてはずっとやり続けて貧乏を動物業界でやっておったんですけど、なんとかですね。それでちょうど売れるわけではないのは僕らもしみじみ。動物フィギュアがどれだけ売れないか。

だって『アニメ』（：平凡社の動物雑誌、1993年休刊）という雑誌も当時は廃刊になってしまい、『恐竜学最前線』（：学習けんきゅう）という恐竜専門誌も何誌か出たらすぐ終わる。動物業界というか、動物写真家である松村の、彼も別に動物造形が主でやったわけではなく、たまたまイラストを描いていたら自分も物も作れたので、うちに87年に売り込みに来たような男だったので。動物業界みんな貧乏だったわけなので、「動物売れるわけではないよね」と。でもとりあえず最低限動物配れたらいいよねと思ったら、いきなり。それこそ本当に化学変化なんですけど。

動物業界といっても博物館とか伊丹の昆虫館とか動物園の人、いろんな博物館の学芸員、そういう人らを通じて。当時は『テレビブロス』という、今廃刊になってしまったけど、サブカル的なものに紹介されたりとか。『BE-PAL』という、これ今でもありますけども小学館の本であったりが、いきなり取り扱ってくれたりとかして知らん間に、というかいきなり火がついて。

チョコエッグというのは卵形チョコレートなので、夏になったり春以降は溶けるから売れないのね。3月、4月が終盤になるんですが、それが出るんですね。最後に出た3月には第1弾21種類、第2弾21種類、第3弾に21種類プラス、ツチノコというシークレット。これがシークレットというブレイクの始まりだったんですが、たまたま、言うたら遊び心の裏メニューみたいなものですから。

ちなみにシークレットって、僕らの真似してバカな色んなフィギュアメーカーがガチャガチャでもお菓子のおまけでも入れますけど、「シークレット入り」と書いたら、「それシークレットちゃうやないかい」って。シークレットは分からんからシークレ

ットでしょって。何も「シークレット入り」と書いたら、それはシークレットでも何でもない。という話もあるんです。それをしないと、フルタさん。

僕らもこれちゃんと話を聞いてもらうのやっぱり苦勞するのは、メーカーとして全然違うものが1個入っていると、ツチノコ1個入っていたら、「これリストにないものが入っていますよ」ということで文句を言われると。クレームの対象になるとビビりはったんですが、「ええやん」と。「もしそれがまず来ないだろうし、来たら来たで換えてあげたらいいじゃないですか」という話をしたら、それがもう当然1つの箱がね、こうやったらダンボール1ケースに1個だけ入っているんですよ。120分の1だったかな、確か。含有率が。みんなケース1個にどっかに端っこに1個入っているんですけど、それが最後の火をつけて1年目が終わって、99年から2000年の春に終わったんですけど、もうその次の2000年の秋からが、みんなもう始まる前からとんでもない人気で。だから最初にあれ240万個かな。1回目準備しても間に合わなかったんですよ。だってそうやないと3年間ね、1億3,000万個なんか売れるわけじゃないですから。

それが売れて翌年のもっと火がついたのが2021年（：2001年？）にPARCO（：株式会社パルコ）さんと組んで、PARCOで海洋堂のチョコエッグのフィギュア展（：GO!GO!海洋堂展）を、動物フィギュア展をやったりとかしたので、その時にPARCO、バレンタイン限定ヒメネズミというのを作って。それが入ったことによって、もう社会的問題になるぐらいに、パルコの早朝のバレンタインデーの前に、大量の冬の、ちょうどたまたまあの時スペイン坂のところで、僕も見に行ったら、すごい行列でね、並んではるんですよ。大阪では大阪で、心齋橋のPARCOでは、それこそああいうものって、今でも転売屋さん何もうそですが目ざといヤクザさんが「これは銭になるで」って買いに来た。朝日新聞にも載ったけど、ニュースになるぐらい。それこそ「売れやー」ということで大暴れすることで警察沙汰になったりとかする。ちょっと問題もあるぐらいに、もうますます話題になって、日本の動物コレクションは2000年の終わり、2001年からは大爆発ブームになったんですよ。

それから次にペット動物コレクションというのを行って、フルタさんとは絶好調で、すぐその後に第2弾のチョコエッグとは別に、もう一回シリーズやりましょうということで。彼らは「ディズニーやってください」とか、「絶対に嫌」と。そういう人気キャラクター。「なんでせっかく動物というパブリックドメインで勝てたものに、せっかくキャラクターを入れてどうするんや」と言いながら、勝手に僕らとは別に、彼らは別グループでディズニーやりやがって「チッ」と思いましたけどね。それは僕らが勝ち得た、その動物で、それが当時他のいろんな大手メーカーが。それこそバンダイさんもキャラクター、ウルトラマンであったりとか『デジモン（：デジモンアドベンチャー）』であったりとか、他にも、なんかいっぱいそのキャラクターを作ったものがチョコエッグと同じやり方で、各お菓子メーカーがやったんですけど、圧倒的に動物が勝っているというのは、痛快極まりない。もう最高の気分ですよ。

これは模型の神様と僕はいつも呼んでいますが、海洋堂さんって本当に、いろんな意味で危機がいっぱいあっても、そういう運の良さというか。ジタバタして動き回っていると、何とかいいことがあるもので、これって僕らの地元の高知で、最後晩年にヒットを飛ばしたやなせたかしさんが、来年『あんぱん』（：NHK連続テレビ小説）とい

うのがあります。『アンパンマン（：それいけ！アンパンマン）』であの人がヒットを飛ばしたのは70歳くらいからですから、それまでは言うたら一応ちゃんとした漫画家さんで活躍はしていましたが、貧乏な人ではあったが、それこそ棚ボタの、棚からぼた餅でヒットしたというの。

でも棚ボタの人生。彼もよく言われて、僕らもずっと高知の地元で（：やなせさんと）一緒だったので。いろんなところで、「動かないで上から落ちてくるところを見ないと、ジタバタ、ジタバタ、動き回るとね、ぼた餅落ちてくるんですよ」。だから北原白秋の「待ちぼうけ」じゃないですけど、うさぎが飛んで出て、木の根っこで、木の根っこを山のように作っておいたらうさぎこけるやんと。1個しかなかったらうさぎ大してこけんけど、木の根っこいっぱい植えて、ころりころげた木の根っこで、木の根っこいっぱい用意する。だからジタバタ、ジタバタ、僕らもやってると、たまたまその動物が、模型の神様が与えてくれたヒットになって。それが3年間で1億3千万個。ただ、その後困った問題としては、フルタ製菓の中で内紛が起こって。大儲けしたわけで、一族のお父ちゃんが、言うたら社長の、乙彦（：古田乙彦）、鶴彦（：古田鶴彦）、亀彦（：古田亀彦）やったかな。甲乙、亀があったんだよな。鶴彦さんが、亀彦さん。乙彦さんが社長で下の2人が言ったら父を追い出す。副社長と専務が、クーデターが起きて。社長が解任で、社長の息子でやった豊彦さんという、みんな彦がつく人なんですけど。そのフルタさんの豊彦さんがいたチョコエッグの僕の担当で、その人も飛ばされ、会社でも「さらばチョコエッグ」というアジテーションの文章を2002年のワンフェスで配ったんですよ。

うちはこういうフルタとの内紛のおかげで巻き込まれて、追い出されてしまいましたと。「僕らを助けてください、どこかないですか」と言ったら、そのチョコエッグのチラシをまいた翌日かな。僕がたまたまゲストで呼んでいたクリス・ウェイラス（：Christopher James Walas、『グレムリン』などの造形作家）さんを京都で案内しているときに、2002年の2月かな、のときに携帯電話に電話があって、タカラの時の当時のタカラの社長、佐藤慶太さんから電話があって「うちでやりませんか」ということでタカラと組んでチョコQという、本来原型も用意してフルタでやるつもりで準備していたものを急遽間に合わせて。今度はタカラトミーと。今はタカラトミー、当時はタカラさんでしたけども。次に用意していたワールドタンクミュージアムとか、いろんなタカラとのコラボがそれから始まったんですけど。

ですからチョコエッグに関しては全く、本当に何の僕らも仕掛けもなく。それこそたまたま松村しのぶという動物オタクが、彼がシリーズ構成、解説、それから原型製作。面白かったのは本当に動物オタクなんで、20種類の動物に、それこそ最初にウスバカゲロウの幼虫ってアリジゴクですよ。何へびやったかな。へびさんでやったりとか。それからかわいい、ニホンザル、それからトキ、タンチョウヅル。いろんな正しい、ヤマネとか可愛い動物も。カエル、アマガエルとか。そういうバラエティに富んだ動物の展開があったので、それがまた動物オタクの人たちの心をいい感じでハマったので。

だから松村くんにとってはすごいんですよ。20種類の原型を作るとなると、本当に2日、3日に1個原型を作らなければいけない。ということは年間にどれだけ作ったんだ

というぐらい、彼は。ただ今みたいにインターネットも何もなく。松村くんというのは本当に頭の中に、家（：書？）があっという間に動物業界、バードウォッチングの世界であったり、パンダのマークの WFF（：WWF）か何かで日本のワシントン条約のところであったり、動物業界長かったものですから、動物に対して、魚類であろうが。一番、奴は本来は水産大学を出て、クジラなりを追いかけたりとか。ボルネオにオランウータンを見に何ヶ月も行ったりとかする。いろんな本気で動物の好きな行動派のオタクなので。チョコエッグの後でも休みがあったら沖縄に 2 週間ぐらい行って、動物ハンティングをする。ハンティングでも狩るんじゃないで、いろいろと森の中、山の中走り回って、いろんな動物を見る。会う。それから触る。海沿い行っても、そういうカニを持ったりとか、変なものを見たりとかして。そういう動物が本気で好きな人間だったので、彼が全部ね。当時は、今では苦笑してますけど、自分の知識と、簡単な本しかなかったの、今はインターネットでもすぐ出ますけど、そういうのを調べながらなんで、指の数ちょっと間違えたりとか、そういうのが何個かありましたってくらい。

でも、すごい勢いで、指先から天才的な技で、今でなったら確かに本人も「いや、あれ恥ずかしいです」と言うけど、さっと作れる。言うたらラフな絵を描くようなものですね。北斎（：葛飾北斎）のああいう覚書みたいなものというか、絵を楽しむ。そういうものと一緒で、本当にいい感じのサラッと感がちょうどミニチュアのサイズにもあって。今だったらデジタルで、彼も今 1 個作るのに 2 週間以上かかるんですよ。造形に関しては。ただ、当時は 2 日で 1 個作るくらい、ひどい状態。1 週間に動物 2 匹、3 匹かな、大体作ってましたし。でもそれに対応して出来上がった。原型できて、構成考えてやってくれたし。

その後、チョコエッグだけではなく、それこそ動物。ペットコレクションも、動物も犬も猫も。それこそセキセイインコから爬虫類から、全部のペットまでやり出して、それこそ熱帯魚から。それを全部作れる人間が約 1 人で、ワンマンアーミーで、全てをできた人間がうちにおった。それをまた売るプラットフォームができた。コンビニというところで、動物を、本当に僕も思っているのは、薄い大気ですよ。

だから地球上にある大気圏の薄い層に火がついたので、ポーンと。濃い人たちというのは、よくみんなマニア向けの仕事で、マニアの対応にしたから、その後、うちに対して、本当にいろんなフィギュアを依頼してくるんですけど、マニアの人向けなんですよね。違うと。マニアが納得する。でも多くのパブリックドメインとして。それこそ『不思議の国のアリス』なんでテニエル（：John Tenniel）のイラストと言われてもいきなりわからんけど「あ、見たことがあるよ」とか、鳥山石燕の妖怪であっても、戦車であっても、あと恐竜関係で味覚糖（：味覚糖株式会社）と組んで恐竜やったりとかしてまして。これを松村中心にやっている。どれだけ松村に作らせたんだろうねと思います。

そうやってパブリックドメインで確かに無人の野に行くことで、ありとあらゆる、ここにある、全部で今ここに 8,000 種類ぐらいのフィギュアがあるかと思いますが、ただ僕らが思っていたのは必ずそれは、まずは「キャラクターをしない」というのが自分たちに対する 2 年目ぐらいまでの法律として、パブリックドメインで。そういう

みんなが知っている。それこそドリンクのキャンペーンとかでもセブンイレブン（：株式会社セブンイレブン・ジャパン）から頼まれて、ムシキング（：甲虫王者ムシキング）というのが流行っているから、ムシキングを作って。バカかとか。虫といえばファーブル（：Jean-Henri Casimir Fabre）だろうということで『ファーブル昆虫記』をやるんだということで『ファーブル昆虫記』を僕らは世の中に教えてあげる。ある時は岡田斗司夫という怪しい人間がやってきて、「宮脇さん、宮脇さん」と。どうしたとか言ったら「宇宙をやりましょう」と。企画（：王立科学博物館）を持ってきました。宇宙というのは宇宙雑誌なんてもう完全になくなってしまふ。ただ、お菓子のおまけをプラットフォームにすれば宇宙ロケットというものを第3弾までやったんですけど。第1弾は170万個ぐらい売れるわけですよ。僕はその解説を宇宙業界。つまり岡田斗司夫はエッセイを書いたりとか構成をやりますので知り合いの宇宙関係の学者でやったり、あとモリナガ・ヨウというイラストを書く人に、いろんなところでルポ取材を行かせて本当にひどい時は1泊3日、ヒューストンへの旅ということで、本当に取材だけで行かせたりとか。すごいんでね、機中泊2泊ですよ。遠いから。ということで、できるだけ多くの人にいろんなものを。僕らは力を、これはすごいものを手に入れた。つまりバラ色の未来が、日本でフィギュアという言葉が、僕らは模型フィギュアが、結局は市民権を得られなかったと今も思っていますし、普通にフィギュアをみんな買ってくれるような人。一般家庭にフィギュアが飾られる状況を作りたいという、模型を作りたい。だから海洋堂の館長のスローガンは、64年から「創るたのしみをすべての人に」というのがプラモ屋だった時。僕らとしてはその心というのは作る楽しみを全て、作られるものの、言ったらものの楽しみを多くの人に海洋堂は配りたいというのが、ずっと最初の海洋堂のポリシーであるので。動物が世の中にこれだけ広がった。このプラットフォームを持ってコンビニという、世界に。ちょうど当時は、すごかったのはセブンイレブンの、その後常務になった、何とか名前忘れた。セブンイレブンが目ざとかったのはチョコエッグになった翌年ぐらいには、もうすぐにセブンイレブンが7人ぐらいのバイヤーとか、トップがやってきて。で、「海洋堂さん」ということで、自分たちにたくさん売れと。基本的にわれわれと一緒に組んでやろうじゃないかってぐらいの。ワールドタンクミュージアムなんていうのは、戦車に関しては翌年、今は翌々年ですけど、そういったものなんかもほぼセブンイレブンで8割ぐらいは買ってくれて売ってくれたりとかする。そういう、当時は本当にセブンイレブンの個人のバイヤーの力が強くて。今はもうそんなことあんまりないですから。自分の手柄であっても、成功すれば手柄やし、失敗すれば自分が責任を取るしかないような戦い方をする会社が、ちょうど僕らと波長が合って。いつときセブンイレブン限定のドリンクキャンペーンとかってことは結構やってたんですよ。そういう海洋堂的、強引に話を進める作戦というのは、いろんなところで展開できて、パブリックドメインである水族館であったりとか、そういうものがいっぱい作れて僕らとしてはいい仕事ができただけども、結局は2006年で僕もやめりゃいいのに自分でもと思いつつながら、食玩撤退宣言というのをしてしまったんですね。つまりなぜかという、2005年ぐらいから2006年にかけては、有相無相、ありとあらゆるメーカーが食玩域にみんな殺到してパイの取り合いになって。「なんじゃ前らは」

と。こんなところでちっちゃなパイを、僕らがいくら独自性あるものやっても埋もれてしまうんですよ。僕ら自身、僕自身も、海洋堂自身は別におまけ屋ではないというすごい自負があって。100万個も売れなくなったら、戦車のフィギュア、ワールドタンクでもチョコエッグでもそうなんで。チョコエッグでもチョコQとやっても、「こんなもんやとれるか」って。今はほんでその口(:当時の発言)やめとけって言いたかったんですけど。「100万個売れない商売なんかはおまけじゃない」とか言う。やめとか言ってね、カッコつけてね、やめちゃったんです。で、リボルテックというまた新しい市場を作る。

アクションフィギュアを作るわけですけども。まず、その6年間の戦いは本当はもっともっとバラ色の未来が、フィギュアが売れて、普通に皆さんが買ってもらえる。ただ僕らとしてはやっぱりおまけになってしまう。そこでつくづく思ったのは、おまけにした瞬間に1億何千万個、それまで50個、100個しか売れなかった動物が、お菓子のおまけで、(:商品本体の)チョコレートは捨てるんですよ、みんな割とね、ガムでも何でもね。でもその理由として、エクスキューズとして、僕はフィギュアにはお金を出さないというものが、言うたら当て物の景品にした瞬間に急に買いたくなる。とても良くない当たりがついていると買うと。

だから今でもバンダイさんが一番お金かけられるプロジェクトって一番くじなんですよ。でっかいフィギュア作ったりとか、ああいう原型生産の天下一、造形武道会とかやって。すごいたくさんのお金をクレーンゲームでやったりとか出すじゃないですか。あれって全部当て物なんです。コンビニってあんなめんどくさいやり方して、みんなそれでフィギュアを欲しくなる。あんなでかいフィギュア普通、買えへんやろ、お前こんなでっかい。『ONE PIECE』の80センチもあるようなものが当て物の景品になった瞬間に急に欲しくなる。クレーンゲームでもいろんなぬいぐるみがあるとか、フィギュアがあるじゃないですか。あれ、セガ(:株式会社セガ)にしてもバンダイにしてもどこでも、あれにお金はかけられるわけですけど、でもみんな買う方も、あれが普通にフィギュアで売ってたらそんなには買わないけど、あれだったらお金をかけて何万個、何十万個作れるわけなんで。

それがね、やっぱりこのおまけビジネスが、今だから空前のガチャガチャブームなんです。いろんな、イズミヤやイオンとか、ああいうところでも、どっか店消えたらみんなガチャ屋さんになります。空港行っても何しても。だからガチャは今、空前のガチャバブルで、ただ今儲かっているのは機械作っているバンダイさんのマシンであったり、タカトミ(:タカラトミー?)であったりありますけど。だからあれ例えば500円、今税込みまたは400円のもので大体流通出すのにメーカーから50パーセントで出したりとかすると、400円のものだったら200円。税込みで200円ですから、180円ちょっと、181円なんです。それ10万個売ってもね、1個に利益が20円ぐらいしか乗せない。10万個今売れないんですけど、5万個ぐらいとか10万個ぐらいで。そうすると1つで180万円とか、あの天下のメーカーがそんな粗利ぐらいで普通で考えてやってるわけではないので、みんなひたすらギアを落として、もうメーカーでも10社ぐらい。ガチャメーカーが、ちっちゃいメーカー、大手メーカーを独立した人たちとかそんなんで、みんな当て物フィギュアを山のように作るけど、全員がもうきつい

坂をギア落として登ってるような。でも今バブルなんですよ。儲かってないバブルが起こって。でもガチャ屋から、あれ当て物だから、あれもし中身買えるようになったら、あんなくだらん雑貨みたいなものは誰が買うねんという。

——それはやっぱり当て物として、いわゆる当たった、外れ。外れたいうのもちよつと語弊がありますが、自分の求めているものがたまたま出るかじゃないかというスリル性というか遊戯性がそこにあるから。

宮脇：でしょうね。つまりフィギュアにお金を出さないというのが、僕の持論はよくちよつとあつちなこと言うんですけど、日本は世界で一番フィギュアを買わない。好きじゃない民族で二次元文化の国なんで、お金を出して。

普通に日本にまずリビングという概念はないですよ。居間に置いているものは、居間というお客さんを迎えるところは一輪挿しとか壺とか掛け軸とか。つまり、みんな二次元好きやと。立体物と造形物に対する、昔から工芸的なものというのは『なんでも鑑定団』なんてお金つかないし、それを好きな人って本当にいないんですよ。ようあつて壺に色がついているぐらい。縄文人が消えてしもうて弥生人になって、僕らそれこそ誰や？お茶の人。

——★池田研太★さん？

宮脇：違う、違う。秀吉に殺された人。

——千利休。

宮脇：千利休的な。引き算のわびさびって、「死ねばいいのに」と思いますよね。まあ死んじゃったけど。信長さんなんかみたいな、派手な、秀吉的な、どっから家康が悪いのかっていうのもあるから、それ以前もそうですけど日本の文化で、それこそいろんな権力者。何でもあつても自分の家を飾ろうなんてみんな思わんでしょ。あんな寂しいところに日本間であつたらあんな寒いところで、よくもあんなところ生活、お寺でも何でもそうですけど、それが西洋文化と日本文化の違いですから。美術展も何でもそうですけど立体物を喜ばない日本人というのが根底にあつて。

僕らはそれに抗っているから、お菓子のおまけ、やっぱりヒットしたのは、荒俣宏さんが言ってもらったのは、「小さくて精密で、尽くし物である」と。まあ尽くし物ってコレクタブル。その小ささがやっぱり、よく僕らの知り合いで、聖（：咲奇？）さんというおっちゃんがおるんですけど、仮に僕らが作った、こういうの見たら、この大きさやったら「ほお」ってなるでしょ？僕らにとってこのちっちゃいのは、こう見るんですよ。「ほー」って、日本人がやっぱりこの精緻なもの。パブリックなところに自分のものではなくて、本当にパーソナルな部分に置くものというのは急にね、愛おしくなってくるみたいな。だから日本人の身の丈に合うのは、このサイズやったんやと。小さい、精密、コレクタブル。そして当て物という景品であると。

## ○「飾る文化」への視線

——そうですね。それで気がついたのはチョコエッグというか、コンビニで出る、あるいはガチャガチャで出る中に入っているフィギュアというのは、リビングではなくて、例えば会社の机の上とかね。

宮脇：そう。パソコンの。当時は厚みがあったから、みんな上に飾ってくれたんですけどね。

——あるいはデスクの上とか。ああいうところにむしろ飾られている傾向があったような気がするんですけど。

宮脇：そうですね。日本人はさっき言ったように、リビングはないので、玄関にほら、所に。床の間あったからって、飾る文化はないでしょ？海外だったら、みんな飾しい。これぐらいでっかいフィギュアがキャビネットのサイズに置くサイズのフィギュアというのは、フィギュアリン（：「フィギュリン」の言い間違い）からしても何しても置物文化あるじゃないですか。日本はないのですよ。だからさっき言ったように飾り物というか、二次元のものをありがたく。それこそ人の書いた文字が嬉しい人たちで、シャラシャラと書いて偉そうな人が「何書いてんねん、これって」ぐらい。あれが掛け軸で、それ好きやと。薄い墨でサーッと書いた。「あれがええのか君たちは」って。ええらしいですよ。

それこそ二次元を飾るにしてもそんな文化はないし、それこそ KADOKAWA さんがどこの偉いところで応接しても何しても飾っているのは、なんか洋画みたいな富士山とか日本やったらそんなんとか写真とかですね。立体物でも花瓶とかお花しか置いてない。「フィギュア置けや、フィギュアとか」。KADOKAWA 行ったらそれこそいろんなキャラクターがフィギュアになって。でかい儲けやということで。うちは講談社さんの仕事やったときに『ああっ女神さまっ』で何十周年かになるときに 100 万円で高さ 80 センチのやつを 3 体、女神さんセットでアフタヌーンなんかセット、記念ということで十何個ぐらい売ったんですけど。

とりあえずそれっていうのは講談社のちゃんとしたお部屋に、「あんたら漫画で稼いでんのやろ？」とか。それは飾りなさいということで女神さまを作らせたものがあったりとかしましたけど、本来だったら KADOKAWA でやり集英社でやるっていうのは、そういうものがドッカーンと置かれてないとだめですよ。

——KADOKAWA の場合、私（：井上）の部屋に飾ってあります。

宮脇：井上さん個人の、それダメ人間の象徴や。今でもやっぱり怪獣フィギュア置いてるんでしょ？いろんなもの。

——はい。

宮脇：それはもうほんとにあれやった瞬間に「あ、この人はダメだ」と思われてしまうじゃないですか。氷川さんでもあんな、他にもコレクターの人って、ああいうのちゃんと飾ってるんですか？よく飾ってるじゃないですか。

——めっちゃめっちゃ買う。

宮脇：アホみたいに買うてるじゃないですか。

——すみません。

——あとね角川食堂といって所沢に KADOKAWA が運営しているレストランがあるんですけど、そこには記念の私の寄付したものも含めて飾ってあります。

宮脇：寄付でしょ？

——海洋堂さんの妖怪は役員会議室に置いてあります。

宮脇：素晴らしい。

——うん。役員会議室に置いてあります。

宮脇：そういうのが置かれるような時代を僕らは作りたいけど、まだまだ一般企業なんて入り口に創業者のハゲの人形がポーんと、胸像がブロンズで置いてあるのが関の山ですよ。でも一時、昭和の初期には街中に置いてあったブロンズも、正成公（：楠木正成）とか、楠木さんとか。東北行っても伊達（：伊達政宗）さんであったりとか。そういったものがいっぱいあったけど、日本はもう今作らなくなっちゃって。

——二宮金次郎も見なくなりましたね。

宮脇：そうですね。ただほら、ローマ行こうが、フランス行こうが、イギリス行こうが、街中に嫌というほど彼らフィギュアがあるじゃない。ローマ行って、それこそああいう、バチカン行ったら建物に 5 メートルぐらいあるようなジョジョ（：ジョジョの奇妙な冒険）みたいな立ち方、ジョジョの方が真似してるんだけどこんな立ち方した、すごいポーズとったジョジョポーズのフィギュアたちが「誰やねんお前ら」ってぐらい何百人も並んでたりとか。

——彫刻文化ですよ。

宮脇：すごいですよね。それこそ街のロータリーには、ネルソン（：ネルソンの柱）があつたりとか、ウェリントン（：ウェリントン公爵騎馬像）があつたりとか、飾ら

れてる。なんとか大公がとか、そういうのが大好きな。日本は本当にそういうものは立体物を作らず、二次元大好きなんですよ。

——那須川市に行くとウルトラマンの像がありますが。

宮脇：あれは象徴で正しいじゃないですか。水木ロードと。

——あと石巻（：石ノ森章太郎キャラの像が街道にある）。

宮脇：それからどんどんそうになっていってほしいのだが、これも割とこの何年かじゃないですか。そういうものが。ウルトラマンにしる。

——大泉学園（：駅前の漫画立像）もこの10年以内ですね。

宮脇：この10年ぐらいの間にだいぶフィギュアと立体物が置かれるようになった。あれは誰かの力が、あれをやろうやということが、やっと50代、60代の人たちがどんどん消えていって（：「権力を持つようになり」の言い間違い）、70代の老害が消えていくと、僕らみたいな、それこそ60代の人たちがやっとそういう権力を持てるようになってきたので。

——あと新潟に『ドカベン（：キャラの銅像）』。

宮脇：ケツ叩くやつね。

——そう。ケツバットで。

## ○近年におけるフィギュア業界への視線

宮脇：そういうものがやっと置かれるようになった。これ本当にさっきのヘリテージングにある歴史が必要なのは、あと20年、30年するともっと僕らの年代で若い人たちが、それこそ今の40、50代。SMAP世代が一番いいお客さんではあるけど彼らをもっと社会的な立場が強くなると、フィギュアなり、オタクなものがやっと（：市民権を得ると）思いますが。

でも僕らが本当に自分でワンフェスやって、つくづく感じた。2007年（：2008年8月3日）にエスカレーターがビッグサイト（：東京ビッグサイト）で故障から壊れて。言うたらそれが7年間かかって、100パーセント日本オーチス（：日本オーチス・エレベータ株式会社）という会社が悪いというエスカレーターの原因が判明するまで7年かかって。ただ僕なんかその時に警察に呼び出されるだけではなく、犯人扱いであったり、ビッグサイトから追い出される、東京都からも嫌われる。朝のワイドショーから夕方から何から国を挙げて「だからキモオタは」という、ワンフェスみたいなものに対するネガティブキャンペーンが。忘れへんぞと。

何か事件があると全部まだまだ、君たち 2014 年になってもオタクに対しては何かあっていきなり手のひら返し、世の中返すぞって。もうちょっとかかるぞ。みんな虎視眈々と狙ってるぞ。変態が出てきたらまた、それこそ野球選手のファンが何か犯罪を起こしても変なことしても野球のせいにならんけど、キモオタが何かして事件を起こしたら「だからキモオタが」ということで、そういうオタクというのは叩かれやすいので、これからもまだまだ僕らは安心したらあかんでっていうのはつくづく思う。2007 年以降からも世の中いかに手のひら返しが激しいか。今クールジャパンで言うてるような人はみんな嘘つきやからね。というのもありますから。それこそお菓子のおまけで僕らは見えたはずの未来はちょっと来んかったという敗北ではあります。

——そういう感覚ですね。

宮脇：そうです。僕らが普通にフィギュアを。例えば大手メーカー、B さんも、D さんもみんなそうやけど、今のフィギュアの売り方でもうクズの商売というか。今、原型、例えば最新のアニメが放送されました。Amazon で予約始まりました。買えるのは半年、来年の夏ですとか。もう春以降になります。こんな商売ちゃうやんと。本来はメーカーがちゃんと出たら普通に商品は買える。

——もうすでにやって（：受注して）る。

宮脇：今はそうやって受注状態でやったりとか、店頭で売れてるものは売れ残りしかないというようなものが普通になって、そういう嫌な商売で、すぐプレ値（：プレミアム価格）がついて。今はもうガンダムですらまともに買えないって、何やねんそれって。

もう、すぐプレ値でしょ。そうになってしまう異常な文化が普通に。

だいたい街に、これ僕もまたまたこれも持論だけでも、それこそ一つ小学校、中学校あったら、というか普通の私鉄の駅 1 個あったら模型屋さんがあったし、おもちゃ屋さんあったし、今絶滅して。僕なんかよく YouTube チャンネルで模型屋さん探すけど、街の模型屋、消えてなくなっちゃいましたし、おもちゃ屋もないでしょ。それがもう論より証拠ですわと。だからそれこそ今は電気屋（：家電量販店）さんと本屋さんとかカメラ屋さんでしか模型買うところがないやんって。「はあ？」って。日本橋と秋葉原ぐらいしかほとんどなくて、街の正しいプラモ屋というのは、世の中に売ってる場所がないのに何がフィギュア文化じゃ、ボケと言いたい。いつも言うてるけど。

——買う場所が変わっちゃったってこと？

宮脇：そう。買う場所が変わった。まともに買えてないようなものですよ。そういうものを作る数も、僕らガリボで売ってた 2 万個、3 万個なんての当たり前だったり、メーカーとしてはそれぐらい作る気概で作れやだけど、今そんなに売れてるフィギュアって、そうないですよ。もう何千個って単位。だから値段見たら分かるじゃない。今

8,000円とか1万円ぐらいのものをみんなヒーヒー言うて買うって、これしか仕方がないですけどね。

——確かに受注生産が多いですもんね。

宮脇：そうですね、受注生産ばかりですよ。それも一番大きなオピニオンリーダーであるべき会社が、そんなプレミアムなんとか（：プレミアムバンダイ）とか言うてですね。プレミアムってちゃんとメーカーでやろうということですよ。普通に街の模型屋、おもちゃ屋を助ける気は全くもうないですよ。だからそういう中で普通に来なかった、今の異常な状態が当たり前になってしまった。だから僕らフィギュアメーカーが普通に作りたいものが作れない。人気のあるものしか今売れない。

例えば僕ら今『ブラック・ジャック』を作りますよって言うても「はあ？」と言われるしね。『葬送のフリーレン』を作りたいけど「『フリーレン』そんなにもう今売れませんよ」と言われたら、買って欲しくない。僕『フリーレン』でやりたい。セットを売りたいですよ。『ダンジョン飯』だってやりたいやん、だって。できへん、売れへんやんって言われて取ってくれへんし。普通に『ダンジョン飯』の表紙みたいなヴィネットを作って売りたいけど、それでは商売にならへんのですよ。今、そういうメーカーはないじゃないですか。なおかつ今も売れているのは、僕はひどいこと言いながら「チチケツ」と呼んでますけど。肌色成分多めにチチとケツしか見えないのかお前らはという。髪の毛がふわーっと乗って、おっぱいと薄いパンツとみんな見て「は一」と言うてたら、もうひどいことをどンドン言い出してきてるから。

でも今の本当にそういう状況は、あとはIPの人気のあるものしかみんな。そのまたIPの人気もそんなに長く持たないから、今『SPY×FAMILY』と言うても誰も買ってくれるわけないもん。あの時の盛り上げはどこに行ったんやというぐらいでしょう。

——冷めるの早いですよ。

宮脇：冷めるの早いですよ、今ね。そういう中では本当に一気にわーっと盛り上がるけど、すぐに。その時その時の流行りをみんな追いかけてしまって、各メーカーも志のあるメーカーで。僕らが最初にお菓子のおまけの時代に手を付けたのは、例えば『ハイジ（：アルプスの少女ハイジ）』であったり、『赤毛のアン』であったり、タツノコ（：タツノコプロ）であったり。当時はそんなに、今でもそんなには売れないけど、そういったものをお菓子のおまけにしたりとかやって、製品化して売ったりとかしましたけども。そういう中ではなかなか「これが」というメーカーの志を示すものはなかなかないですよ。みんな頑張っってそういうのを作れ、メーカーをやれと。ワンフェスはそういう中ではいろんなものがまだなんとかなるけど、いろんな種類のフィギュアに出会える場所としては、まだまだ唯一の場所であるかなと思ってますね。

——先ほども日本人は立体じゃなくて平たいものが好きということで、今思いついたのは、今アクリルスタンドがね。

宮脇：アクスタね。

——あれ確かに平たいなと思って。

宮脇：あれがみんなお前らが好きなアクスタや！っていうのは、本当にあれこそ。それこそが全ての象徴。あれが本物ですよ。

——あれ平たいですね。

宮脇：間違いもないし。今本当に僕はクソみたいに思ってるライセンスが、それこそ例えば竹谷さんの作品とかね。こういうオブジェを、キャラクターも作りましたと。それを監修するバカがおるんですよ。監修。別に原作者が、「ああ、これいいですね。でも、僕のイメージは、こう、こう、こう」というのはわかるが、それこそ、造形知らない素人の交通整理の(：版權窓口の)お姉ちゃんあたりが、「このちょっと手の長さが漫画の設定集と比べてちょっと違いますね。このチェーンソーをもうちょっと大きくします」。本当に竹谷さんに言うバカがおるんですよ。天に向かって唾を吐くというのは、このことで。すごいそういうのが当たり前に。今だからそういうアニメなんかを作るのは、みんな製作委員会とかいう組織で。本当に造形のことを知らないド素人が、そういうメーカーの監修をさせてもらいます。誰に向かって物を言ってるんじゃないかって。

十何年前に、僕も某 KADOKAWA さんのところでちょっと言ったことが。これは「なんかこれ」という、船みたいなお姉ちゃんがいて。船が、こういうパーツを付けたフィギュアがあるわけですよ。(：『艦これ』のこと)これは何だったかな。何のキャラクター。パーツを付けるでしょう。この手がこっち。ちょっと大きく見えるように。僕が改造が得意なパーツでも付けるんですが「手がちょっと大きいです」。あれはわざわざ文句を言いに飯田橋まで行きました。

——そうですか。それは失礼しました。

宮脇：いやいや。特にあの時の社長じゃない、誰だったかな。KADOKAWA の井上さんじゃない。もう一人よく知っている人でその話をすると「そんなことは言ってください」って。「わざわざそんな社長に言いにいけるか」というぐらいの。そんなちっちゃい話ですけど。それこそいろんな、たまに一時、僕も文句というか、怒りには丁寧に言いますよ。「髪の毛の向きがこっちじゃない？」って。アホ毛の向きに言われたりとかですね。いやもうねって、もうつくづくね、設定資料を見ながら、ど素人のお姉さんとかに、お兄さんに「誰に向かって君たちは物を言ってるのかな」っていうのは、それは昔からハイジの時代からそうなんですけど。線一本のものに当然造形だから口角(：立体としての凹み)を付けるじゃないですか、鼻にちょっとくぼみを付けたりとかすることにさえ文句を言う人たちがいることに対しては、アクリルスタンドはその

ままですからいいと。アニメグッズは良いですなって。2次元でちゃんとなってますね。アクスタこれからどんどん流行りますよ。すぐできるしね。これがみんな欲しいものですよね。クリアファイルは一時、アニメイトなんかではよく売れるでしょうけど、これからアクスタですね。アニメキャラはそれが正義ですからね。

香川雅彦なんてうちで本当に狂った造形作家が『AKIRA』とかなんかやって、本当に強烈に表現者として。尾崎豊系というか、どんな造形も『ラピュタ（：天空の城ラピュタ）』ものでも宮崎（：宮崎駿）ものでも昔から作っても、手の表現が普通『ジョジョ』なんかではこうじゃなくて、これぐらいの狂った表現でこういう感じで表現するんですが「こんなことはしません」と言われるから、香川くんみたいな登場するようなフィギュアができなくなってしまって。そういうものも作れない。だから作家性を強めると香川はこうだ、榎木（：榎木ともひで）はこうだってなって。竹谷さんぐらい化け物級になるからいいんですけど、普通の、だからみんな原型師という名前が当たり前になって。僕としては何が原型師じゃと。

原型師というのは原型だけを作る仕事ですから。僕らは竹谷さんなんかも造形作家とか造形師とか。いろんなものを作るけど原型も作るし、それこそそういうものは造形をする人間として造形作家とか造形師であってほしいと思いますよね。これ見てる人に言いたいのは、大阪芸大（：大阪芸術大学）でいつも言うんだけど、お前ら専門学校で教えてもらってどこかのフィギュアメーカーに入るつもりだったら別に原型師と言ってもいいけどなあ。芸大でこれからアーティスト、つまりフリーの造形作家で今大阪芸大で教えてる大山竜くんであったりとか、今度来週は Entei さん（：Entei Ryu）とか竹谷さんにも来てもらったりとかするけど、作家になれよと。ちょっとぐらい、安定して一番やっぱり腕のいい、今回も卒業生でも、カプコン（：株式会社カプコン）に行ったらドラゴンを作りますとか。メーカーに行くのがみんな多くなって、とほほって。みんなヤクザになろうって。芸大を出たら、こういう学校を出ても絵さえ描いたらもうそこで、以前誰か言ってましたよね。アーティストで。それを売ったら、造形師で売れば作家になれるんだからワンフェスにみんな出て。

造形師のいいところはね、一つ大山竜くんというのが講義して言ったのは、例えば大阪芸大の僕らキャラクター造形学科というところで、私も教授をやってますから偉いんですね。

こう見ても中卒で教授っていうのは面白いですけど。そういう人間が言うのは、漫画とかの世界はいくらうまくても、それこそ鳥山明さんだって編集者とかそういう人がついて、あれぐらいの絵を描く人は世の中にいっぱいいるだろうけども、でも編集者なりいろんな雑誌とうまくいかないとならない成功しないじゃないですか。

ワンフェスなんかでは、美少女をまずうまく作れる人がおれば、すぐメーカーさんが声をかけてくれて。この前の2回ぐらい、3回ぐらい前のワンダーショウケースの中でもオタクドリームじゃないけど、いきなり言ったら商業原型を手掛けて、1個100万以上、百何十万する。10個ぐらい、7、8個ぐらい作ったら年収1000万ぐらいは、すぐ腕さえ良ければ、美少女さえ作れば誰でも勝てるんですよ。

フィギュアの世界って実はそういう意味では、腕さえ、美少女さえ作れば。化け物だけではなかなか厳しい。竹谷さん、そんな金持ちじゃないでしょ。僕らが腹立つのは、

竹谷は高いけど世界でスーパー超すごい人が大豪邸に住んでるけど、また高円寺の、竹谷さんの趣味もあるけど、長屋を改造したところで。それこそ日々貧乏な生活を。大金持ちじゃないんですよ。

そういうのって、やっぱり現場の人というかは、世界の竹谷がそれぐらいしか稼いでないというのは、大豪邸に本来。でもそれは漫画家さん、みんなそうですよね。基本的には超有名なジャンプ系のキャラを描いている以外は、第一世代の漫画世代で、みんな今、なんとかかんとか事務所、それこそ★★とかいろんところが、みんな、あれだけの仕事をした人は、もっとすごい豪邸に住まなあかんけど誰も住んでないよね。何人かはいらっしゃるんでしょうけど。

———というか、あんまり漫画家さんってそんな大きなビルを建てたい人も少ないのかもしれないです。

宮脇：結果的に建てたい、本当にそういうものを僕らも、海洋堂さんだって、たまたまこうやってビルだってお父ちゃんが買って建てたんで。僕もオタクの人ってみんなそういうの求めないからね、別にね。

———そうですね。

宮脇：それを求めたいわけではないけど、でもそういうのは欲しいですよ。『漫勉』見ている、みんないいマンションの中でひいひい言いながら描いているよな。青山剛昌もすごかったですね。頭おかしいですよ、みんなね。それはそれで。

でも本当にフィギュアでも、別に大儲けしてビルを建てようとは思わないし、豪邸に住もうというのはないけど、なかなかオタクの仕事をやっていたら、そんなね。それこそ、ああいう出版社とか、それをやっているところはみんな巨大なビル建てて、会社すごくなってますけど。KADOKAWA、お化けみたいな。『魍魎の匣』みたいな。あれどう見ても『魍魎の匣』だね(：角川武蔵野ミュージアムのこと)。魍魎魍魎が住んでますよね、あそこに。まだ行ったことないですよ。

## ○造形作家への視線とデジタル化

———あ、そうです。ぜひ。ちょっと話があれなんですけど、先ほどの大阪芸術大学のキャラクター造形学科を教えていらっしゃるんですけど、その造形作家をそこから生まれて海洋堂さんに就職なさる人っていうのが結構いるんですか？

宮脇：造形作家ではないけど、うちにも何人ぐらいいるのでしょ。大阪芸大は何人いるの、今最近おらへんか。

海洋堂社員：ナカイさんだと。

宮脇：一応嘘でもない、ニシ氏もそうでしょ。ニシくんも大阪芸術。もう一人いたけ

ど、3人ぐらい。あと一番最初にいるうちのハシモトくんっていうの、ワンフェスやってるのもあれも彫刻家なんですけど、あれは別に出たわけではないから。

そこを出て海洋堂にそのまま喜んで就職っていうのはなかなかなくて。みんな最近の人はね、みんなね、どこ一番、海洋堂貧乏だから。なかなか大手のグッスマとかカブコンとかゲーム会社とかに行ってしまうって、うち大阪でデザイナー学園（：大阪デザイナー専門学校）は結構オノさんからの流れで来るんですけどね。大阪芸大はまだいないんですよ。すごい作家がなかなか現れてくれないのも困ったところで。

海洋堂社員：BOME と合わせて専門学校は多分大阪デザイナー10人ぐらいいるんですよ。

宮脇：いるうちにね。大阪芸大ね。でも大阪芸大で言うと有名漫画家さんもなかなかおらんからね。

——島本（：島本和彦）さん。

宮脇：島本さんぐらいか。これ、大阪芸大の看板背負ってやってるってのはなかなかいてくれないので。造形作家もそうなんですけど。そろそろ出てきて13年やってますからね。

うち親玉が、ボスが里中（：里中満智子？）さんの下に高橋良輔さんが。だから僕、高橋さんが頼まれて僕も来たのと、あとそこに当時は、東海村原八って若島（：若島あさひ）くんという。すごい、人にもものを教える造形ができて。頭のいい造形作家ってあんまりいないんですよ。

造形師ってみんな BOME さんだって出てきますけど、みんな手にアンギラス（：手足に分散した脳をもつ怪獣）みたいなのが、こっちに脳みそ、脳みそ、脳みそ。論理的にもものを作れたり、教えることができない人がほとんどで。みんな、言うたら竹谷さんもボンクラじゃないですか。ぼーっと見ても教えて理論整然と教えるタイプではないですよ。頭脳派ではない。

——感覚的な。

宮脇：感覚派ではない。今でも感覚派の人は、論理派の造形師ってなかなかいないんですよ。頭のいい。だから本当に若島くんは、たまたま当時は僕の右腕でいてくれて、彼がいたから僕も大阪芸大というところの先生になろうとしたんですけど、たまたま1年目にして若島くんががんで倒れ、人にもものを教える酒井くんというのも好きだったが、大阪芸大呪いでもあるのか、またがんで死に。みんなそんなんばかりでね。あさのみさひこも一瞬おったんですけど、その辺があったんで大阪芸大というのは、そういう中では造形作家が先で、感覚派の人ですよ。多いので、たまたま今度、来週ちょっと伸びてあれなんですけど、中国の作家で Entei Ryu さんという天才の女性がいますが、若くてですけど。

彼女は論理的に自分で、最近これからますますデジタル化してくると頭の脳みそを使

わないとできなくなってきた、前は指の脳みそで結構指先が勝手に、本当にこの手の指の中から、松村くんもそうですけど、生まれるんですよ。猫がこうやって手品のよように。アメ職人なんかもそうですよね。

そこまであれじゃないけど本当にトカゲであろうが、何であろうが、こうやりながら指が作ってってくれる。完全に頭の中に入っている、ビジュアルが、これが形になっていける能力のある人が造形師の昔からかたぎの。これからはデジタル造形になるので、きっとロジカルな造形師は出てくると思う。今まだそれに長けた人は、そのEnteiさんはすごいんですけどね。

——ちょうどセンムもご指示なさったと思うんですけど、今、造形作家の方がみんなデジタル移行してやってるって。これは何かそう思ったきっかけってのはどういう？

宮脇：どれぐらいかね？後でデジタル話も出てくるだろうけど、デジタル世代になったのは、どれぐらいかな。実感としてあまり。僕も海洋堂がそのデジタルに移行したのが、宇野氏（：宇野智浩）が入ったのが3年ぐらい前か4年ぐらい前でしょ。入ってきて、うちもそうしなければという。一番うちはデジタル後進国だったんですが、その山口（：山口勝久）くんであったり、松村くんというのは、言うたら頭の中に絵心がある人間は、勝手に独自でね。山口くんはもう何年ぐらい、本人何年ぐらいまで言うてるかな。もう6、7年ぐらい以上前から、8年ぐらい前から独自で、独学でデジタルの。感覚的にはこれからはデジタルで。

松村くんなんかは元から絵が描ける人は、もう本当に絵を描ければ、絵心さえあれば、これは僕の持論であるが、「絵さえ描ければ造形はできます」と。指先でも何でもそうですけど。漫画家さんでも、岡崎武士みたいな。あの人は漫画の練習のために造形やったようなもんですけど、鳥山明さんの時代から、永野護から、みんなタミヤの35分の1の人形改造コンテストでカラーで別格の作品を作るじゃないですか。だからそういう意味では指先力のある人は、それだけ描けるし作れる。でもデジタルに変わってくるのは、デジタル造形作家で爆発的にすごい評価を受けたって誰やろうね。デジタルで、事件的なものは、なかなかこの日をもってとか、ここをもってデジタル時代になったというものはなく。本当に美少女をデジタルにするのは本当につい最近ぐらい。でもそれで有名作家とかこの人というのはなかなかないのですよ、まだ。

やっぱり別格で、美少女フィギュアでもこの前中国の上海ワンフェスで出てきた。中国はみんなもうデジタル造形作家が周知になっていますけど。でも彼ら彼女ら中国で一番評価されている別格中の、これはグッスマさんも言っているけど、植物少女園の名前何やったかな、植物少女園の名前。

海洋堂社員：創彩少女（：創彩少女庭園）。

宮脇：いや違う、違う。創彩少女は子供向けのプラモやつ。チチケツのプラモや。植物少女園というのをすぐ調べて。その作家がおりまして、彼女は本当にとんでもない指先の天才の儂げなフィギュアを作れる人なんですけど、やっぱりまだまだアナログ

なんですよ。それに代わるデジタルですごい美少女フィギュアというのは、まだフィギュア造形師というのは、僕もちょっと知らないかな。それこそ智恵理くんであったりとかグッスマでやったりとかしてるし。他にも BOME さんも最近デジタルでついにやるようになったけど、まだまだデジタルという形ではないですね。

でも今もワンフェスでみんな登場してるのは全員デジタルの時代になっているので。みんな画一化されてすごい繊細だし綺麗ですけど、デジタルの絵というのはちょっとやっぱりアナログとは違うところが。僕らは特に僕自身が 67 歳のジジイからするとデジタル、アナログは好きやん。ダメ、ダメと。指先力の方が大好きなので。氷川さんはデジタル、やっぱり今も絵の人ってデジタルですから全員そうですよね。でもないですか、アニメの世界では。

——アニメーターはベテランもやっぱり手描きですよ。

宮脇：ですよ。

——順次若い人がタブレットで参加するようになってきているということですね。

宮脇：また絵コンテが来ているのはやっぱりアニメはまだまだ指。

——コンテは動画にできるのでタブレットで描いてる人すごい増えました。

宮脇：そうですね。デジタルこれが増えては、造形はそうなってはくるでしょうし、早く僕らもそのおかげで裾野が広がってくるはずなので。つまり今では原型作ろうと造形しようとする、粘土、スカルピー、ポリパテ。指先と場所と、これ、でかいものを作るんだったら、本当にテーブルなり格闘しなければいかんのが今はもうヒヒヒヒー（：ヒラヒラ？）とやってしまえるので。特に重力がないから（：粘土だと垂れてしまう）髪の毛がフワとかね。そういうことを。衣装もヒラヒラとか、そういうことができてるので。

——やっぱり表現も変わってくるわけですね。

宮脇：変わってきますね。そうなるので、フワフワヒラヒラしたものはどんどん増えてきますが。とはいえ、昔ながらの彫刻的な、彫塑的な、それこそギリシャ彫刻、ローマ時代のああいったものも出てくるのはあるんだろうけど、まだこれから今まさにそれが移り変わる真っ最中なんで、デジタル造形師出てこいというのは思いますがね。海洋堂も一応みんなデジタルだもんね。

海洋堂社員：全員。

宮脇：今の全員が。BOME さんまでがデジタルになっちゃった。でもデジタルより粘土

の方がいいな。今の BOME さんの味もな。どうしてもそれは変わってきますね。でも指先で作っていると、うちらも大阪芸大で授業をやりながら、大山竜くんというのも 2 年、3 年で。大阪では 2 回生、3 回生といますが。そこで粘土原型を作りながら教えて。アナログで教えているんですけど、それは指先で粘土も使っていると粘土使いの指先の感覚というのは独特の。特に模型なんかは、1 回デジタルで出力したものを磨いたりとか、型取って組み立てて。そこによって指先から、僕なんかは紙やすりでこすだけでも気持ちいいよとか。この指から指からの。磨いていたり、色塗ったり。結局最終的に出来上がったものは 3 次元のものになるわけですから、それを塗れたりとか。最近はだから全部デジタルになってくると、全部分業制になって。

海洋堂さんだっけそうやもんね、原型作る人と、それから出力して磨く人。これは誰でもいいっちゃいいけど。あと色まで塗らない人というのはほとんどなので、いやそれちょっと面白くないねと。今は自分で色塗る人って少なくなったよな。完全に分業制になってしまって。昔は色まで塗れてなんぼだし、ガレージキットというのはそもそもプラモ系のプラモの上位機種として、これに満足できん人間が自分で塗ったり作品を作れたりとかするが。

——ロットも少なかったですしね。

宮脇：そうですね、松村なんかも塗装できる、ただ BOME も塗装できた、あとはいないかな。塗装まで仕上げる造形作家。商業原型になってくると色まで塗っている暇も、そんなにやらせてもらえないというのがありますよね、それだったら次の原型作って色塗りは専門おるから。

海洋堂社員：古田さんは自分で。

宮脇：古田はそうやね。古田くんは動物造形作家ぐらいですなという感じで、みんなどんどん分業になってきてます。面白くないねというのは。

## ○フィギュアと現代アートの接続

——ちょっとまた話が変わるんですけど、例えば BOME さんが村上隆さんのアートとしての原型。原型って言っちゃいけないのか。造形。

宮脇：原型は別に、原型作ったりとか。

——やられたりしたんですけど、センムから見てアートとフィギュアの違いというか。あるいは違わないのかとか。その延長にあるのかとか。どういうふうに捉えて。

宮脇：あれは最初に村上隆が、あれこそ岡田斗司夫が紹介しよったんですよ。「宮脇さん、宮脇さん」って、いつものあの調子で。「今度ね、村上隆という変なアーティストがおります」と。「こいつと組んで仕事をするとパリに行けます」と。ほんまに

そうなんです。パリにね、それも檻に入れて、キワモノとして、珍獣としてパリに行きますよ。面白いから一緒に組みませんか？というのが岡田斗司夫の最初の口説き文句でした。

村上隆がそれを紹介されて、当時は BOME さんというのは、さっき言ったように 1 時間で 3,000 万稼ぐ。ワンフェスだけでもね。男で 1 年間 6,000 万、お前だけ売り上げあるんですよというところで、面倒くさいのが来たけど面白そうではあるなど。

村上隆という人間と何度も話しても、あれは現代美術で。僕らは『ブルーピリオド』じゃないけど、ピカソ (: Pablo Ruiz Picasso) が何がええねんとか。ピカソじゃない、ゴッホ (: Vincent Willem van Gogh) の良さがどうなのか、ブルーピリオドの世界ですけど。「アートって何よ」と。こんなクソ下手な、村上さんの子分でいわゆるブイブイ売れている Mr. という造形アーティストもおって。彼なんか本当に日本アニメの下手くそな、日アニ風のド下手もド下手。こんな下手なやつがアーティストって何それって。

村上隆だって別に、最初に Ko<sup>2</sup>ちゃんというのを描いたときも本人の絵が一番やってほしかったのはあれだったんですね。コミケで見つけた HIROPON ちゃんという、乳首こんな巨大な、ここから出ているお乳で縄跳びをしている。これをやってほしいんですよって。これ作ったら、本人はそれでオタクでウケると勘違いをして、「村上さんってバカか」って話をしながら。オタク国に最初入りたかった。オタクにある、金田伊功、何々憧れて自分もアニメーターやめてということがあった人ではあるが。

「いや、こんなでは何言ってるんですか」ってところと、そこからのオタクとアートの境界線を探して。

結局でも思ったのは、村上さんも今の日本の美術教育のダメなところは、うまく技巧的でなければいけないとか、そういう綺麗でなければ。それ岡本太郎に「綺麗なのが必要ないんだ」という形もあるが。言うたら新しいものを生み出してやったもんが一番偉いという、やったもん勝ちというところで新しいこと。それから自分が思った表現を誰にも真似されたことがない、真似したものではないものを作ることがそういうものであると。だから BOME さんなりも村上隆と組んで当時の流行りもののアンミラ (: メイド服風の制服で有名だったファミレスのアンナミラーズ) の『ヴァリアブル・ジオ』みたいなものをいっぱい取り入れた。あれって基本的にウェイトレスな感じの腰に首にチョーカー、腕にチョーカー、足にチョーカーが巻いてあったりとか、そういういろんなオタクの文脈を入れて、Ko<sup>2</sup>ちゃんを村上さんが何度も。当時のやり取りしたファックスの量だけでもこれぐらいまでどっかでコピーしておいてますけど、それを 2 人。僕もそうですし、なんでこれがアートやねんってつくづく最初からわからなかったけど。

村上さんの的にはこういったものを最初に世の中に発表して等身大でリアル。アニメの女の子を作って、それが評価され。一番最初 120 万円で麒麟アートプラザというところで売れたのが最初の販売価格で、有名になったら 6,800 万で、クリスティーズのオークションになって、今はもう 1 億以上になってますけども。最初はそうやって、別に村上が 120 万で売ったものがどんどん、どんどんと、回を経るごとに、いろんなところを経るごとに、画商さんを経るごとに値段がついてそうになってしまう。そうい

うビジネスというのは僕らにとっては村上さんの今回特に京都で、もののけ京都というのをやって、最終的に大成功してますけども。

村上隆が生み出す、言うたら村上隆のすごいのは、それを、ゴッホなりは別に自分がアーティストと思って、それこそ北斎もそうだけど自覚なんかないじゃない。あとで言うたら歴史に。最初に言ったら100年後、200年後のスパンでもものを見なければいけない。「そうなんですか」と。今やってることがそれを自覚して、そういうものを新しい表現として作ってやろうという意思があるもので、それを評価されるべきところに持っていくものが僕らにとってのそれはアートなんだろうね。だから一応 BOME さんもそうやって村上隆と会ったことによってアート活動はできたし、ただ本人は最初いきなりパリのカルティエに行くまではニューヨークの個展をやったりとか。「俺なんかアーティストじゃないよ」って。「ただ好きなことをやっているだけだから」というのは、BOME は頑なに。

今でもアーティストであることは、僕らは勝手に BOME をアーティストに祭り上げて文化庁長官賞をもらったりとか「やったー」とか。そういうことでやってますけど、BOME は一生自分がアーティストという自覚を持たないし。それは周りからそうやってやってもらいものだし、ただ村上隆のようにロジカルというか、それを戦略的に芸術企業論じゃないですけども、そこまで持っていく人じゃないとなかなか自分でアーティストになるというのは。ただ、さっき言ったように絵で作って売れたりすればアーティストはアーティストなものそうなるわけだし。それがずば抜けた、僕なんかも作家なんてひどい人間で、村上さんにも本当に「センスは才能しか愛さないから」って。才能さえ入っているものが作れば、それを評価できる人間、それは宮脇さんみたいなフィギュアのプロデュースする人間であったり、ギャラリーの人であったり、村上隆みたいな人がそういう評価をされることによって歴史の中で。

つまり BOME さんだって、村上さんが言ってくれたのは、都倉俊一の前で、2年前が去年、おとしですよね。文化庁長官賞をもらいに来ましたという時には、「絶対にセンス、オタクのひどい格好をさせちゃダメですよ」と。後々のためにピシッとした。それこそアルマーニでも買っていけと言われていたけど、それは買う暇はなかったが。そういうオーダーしたもので、パリッとしたものを。やっぱりこれと一緒に歴史が作っていってくれる。それを周りが評価してくれる。自分で「俺、アーティスト」と言っても、それって偽物の恥ずかしい人になるから。それは周りから。「俺すごいですよ」という人はなかなか。よく僕らも、竹谷さんなんか「俺天才」って言わないじゃないですか。すごいアーティストだし、みんなすごいけど、本人は全くその自覚もなく「俺すごいです」という。なかなか作家って、あまりこのフィギュア世界でも見たことないし。

安彦(:良和)さんだってこの前も島根(:の「描く人。安彦良和」展)で、うちのかたやま(:かたやまひろし)ごときがというか、向こうの島根の原型作ったり、うちの造形やってる人間が安彦さんと喋ると。「お前、ちょっと待てよ」と。僕も喋ったことないぞ。神やぞ。本人あんまり知らない。自覚もない。ほんわかした田舎の人間ではあるが、そういうヤスヒコさんですら、そんな「私アーティストです」なんて言うわけじゃないか。でも、仕事としてはすごいものやってるから、それは評価す

る人がおって、されるべき。そういう棚に収まったことによってアーティストにはなれるか、なれんか。でもみんなアーティストで、アーティストであるんだけどね、という。そういう意味では、なかなかアートというもののフィギュア造形。

そういう香川くんなんか、今回文化庁長官賞を竹谷さんととったけども、ただもう純粹に造形に向かうすごい才能のためを欲しいか、そのために人間性を全部捨てるか、どっち取るかと言ったら、だいたいみんなこっち取る人はそういないですよ。天才になるか、ダメになるか。でも割とワンフェスなんか見ても何しても、造形師と人間の性能高い人ってなかなか合っていないですからね。作家とイコール。それはみんな、これ見てる人も何でもそうやけど、そっち取る。みんなでも普通はクラスに50人おっても天才なんか1人もいないわけなので、努力というかそれなりに自分でそういうものを見ながら。

ただ BOME さんがすごい才能を持っていると言え、唯一の才能は、ものが、そのとき美少女が好きな、自分がやっている仕事なり、この40年、1日も休むことはないんです。お盆も正月も土曜日も日曜日もずっと会社におるんですよ。それで得たものが BOME さんの今の。小学校時代からずっと海洋堂に出入りした頃も、一番 BOME というのはヒエラルキーからすると下だったんです。カーストが低い造形作家で。何やっても下手くそというか。「ダメだね、雑いね、下手やね」と。大阪デザイナー学園とか出てアニメーターになって、1回その時同期に井上俊之か。井上くんがずっと一緒に同じ時期に BOME と大阪デザイナーで一緒になって、いつもあの3人、4人ぐらいで、東京の新小岩で4人で生活。3人かな。してて。後でまた聞いてもらったらわかりますが。すごいのが横におったら「俺、こんな絵なんか描いてられへん」って。ほんま昔から天才だったらしいんですよ、井上氏はね。BOME さんもそこでアニメーターになるのは挫折し、東京でなんかフラフラして、本当に偶然に、84年にうちが店できた時に、僕も偶然新小岩に行くことがあって、その場でテレビドラマじゃないですけど、あの新小岩の南口で会うことになって。

「お前戻ってこいや」ということで入れてから、BOME さんの海洋堂歴が始まるんですけど。それを海洋堂に入るときですら、うちの社員にするときというか、うちのイマイくんとは「あいつなー」とかいう話をしながら。「あんなやつなー」ってぐらい。そういう評価が低かったやつだったので。ただひたすら好きで、ラムちゃんを作り始めて、DAICON で、コミケ（：コミックマーケット）で、クラリス作ったりとか、DAICON3の女の子作ったりとか。その後も、ワンフェス出るときもコミケの有名な梅津（：梅津泰臣？）さんとかそういう人らに会いたいと。コミュニケーションを取りたいがためにフィギュアを作るという、すげえ低い志で。梅津さんの表紙になっている雑誌、なんやったかな。いろんなエロ本じゃないか、漫画雑誌、ああいう漫画雑誌の『レモンピープル』じゃないですけど、そういう雑誌の表紙のいろんなイラストレーターで、BOME に聞けば、そういう人と一緒に並びたいということで描いているような、作っているような、志の低い男だったので。本当に好きなものだけを作っているというものでしたね。

でも BOME さんがやったおかげで、今の美少女フィギュアというのは、ワンフェスで彼がずっと80年代後半から90年代を駆け抜けて、2000年くらいまでは、BOME さんの時

代というのは10年くらいあって。彼が作り出した、言ったら1時間で3,000万円売れる現状というのも大行列ができる。そうなってくるとみんな肌色文化にってしまったというのは、海洋堂なり、BOMEさんの功績であり功罪の部分もあるが。みんなだから肌色文化がワンフェスは昔は一番よく売れたのは、僕ら一番最初のワンフェスではハカイダーであり、次『バイオ・ハンター』、シルバ(：「超電子バイオマン」の敵キャラ)とかですね。このポーズで。

——ほぼ同じじゃないですか。

宮脇：ちょっと違う。

——もちろん違う。

宮脇：ほぼ一緒やん。黒か銀かだけやんけ。シルバがよう売れた。「一緒か」って。なんでハカイダーが売れるかわからなかった。最初、僕。これ『キカイダー(：人造人間キカイダー)』なんか全然僕見たことなかったから。「なんや、このケルアみたいな顔とか」。顔があって目玉があって。そういう時代からBOMEさんはずっと訳のわからんオーラバトラー。当時は人の真似してオーラバトラーのズワァース作ったりとか。美少女でもまだそれほど名を成してない85年ぐらいのBOMEさんでしたね。

——ありがとうございます。

### ○アニメキャラクターが立体化したことのインパクト

——美少女、今肌色って話がさっきあったんですけど、それ以前に2Dのアニメの美少女って基本的には立体の形してないじゃないですか。それが立体になるっていう衝撃っていうのは。

宮脇：すごかった。でもやっぱり一番最初は『ファンロード』の秋山(：秋山徹郎)くんであったりとか、三星(：三星政広)さんであったりとか。あと九州のびえろくんであったりとか、結構すごいもの、最初から投稿であったんですよ。『ファンロード』そういう意味では正しいというか。あれでみんなファン活動でBOMEさんもそれ見ながら、「俺もこれやったら」、言うたら全部ね、秋山くんのええところというのは、最近深い付き合いしてて、今度はワンフェスでも一緒になって。別にディスるわけじゃないけど、うまくないですよ。

綺麗な『ミンキーモモ(：魔法のプリンセス ミンキーモモ)』なんかで何でもそういうの、チャム・ファウとか作ってたけど、「なんじゃこれ」っていうのは、「これやったら俺らみんなうまくできるわ」っていうやつが、どんどん現れてくれるっていうのがガレージキットのええところで。「宇宙船(：特撮専門雑誌でフィギュアも掲載)」もそうですけど、いきなりハードルがみんな低いんですよ。聖(：映奇)さんが載せているいろんな造形物の投稿とか、みんないっぱいあるけども、まだまだね。「これや

ったら俺いけるやん」っていうのが、「ホビージャパン」の投稿もそうでしたけど。超一流じゃなく、まあまあうまいけど、でもそうやってみんなどんどん、どんどん重ねてこれたのが美少女フィギュアの始まりだったですよ。

BOME も一番最初にクラリス、まあまあいいのを作ってコミケであいつ売り上がって。ワンフェスがなかったの。そういったものとか。「お前うまいことできてるやん」とか。海洋堂嫌いやったから、海洋堂に対する、嫌いというよりも対抗意識があって、ゼネプロの DAICON3 の女の子を作ったりとかね。「お前、ゼネプロ敵やで」って話しながら。という屈折した心がやっぱり大事な、素直なアイデアやなくて、みんな、なんていうんでしょう。あまのじゃくな。この 60 代半ばの人たちの素直じゃないオタクの。氷川さんが珍しい方で。みんなおかしいですよ。ゆがんでますよね。という感じで美少女はそうでしたね。

最初に美少女が完成された頃っていうのは 86、7 年ぐらいの。僕らもそれこそまどか（：鮎川まどか）の。みんな時代とか『きまぐれオレンジ☆ロード』でみんなまどかを作ってた時代あたりから一気に「ホビージャパン」でもなんでも。

——『うる星（：うる星やつら）』『ミンキーモモ』『まどか』。

宮脇：ただ『うる星』はなんかちゃんと商品化できてないんですよ、どこもね。『うる星やつら』はライセンスの問題もあるのか何か知らんけど、みんな『うる星やつら』の。

——先にプラモ（：バンダイのプラモデル）が出ちゃったから。

宮脇：そう。あれがまたひどかったけど、というのがあって。でも、それがあったおかげで美少女というものが本当にある程度、そうやってアニス・ファームとか、ちょっと「まどか」の後やけども、そういう菊池（：菊池通隆）さんの絵であったりとか、ああいったものが結構。「きまぐれオレンジ☆ロード」もどちらかというと（：アニメ版の）高田（：高田明美）さんの絵の方が影響大きいですよ。まつもと泉の絵よりは高田明美バージョンでアニメのものでやったり「マジカルエミ（：魔法のスターマジカルエミ）」とかあれば、もうちょっと、ほぼ同時期ぐらいか。パーマネントでライセンス取って僕らが売ってたのはそれとか、あと「イクサー1（：戦え!!イクサー1）」とかあたりがその前後。「イクサー1」あたりとか、あともう一つ。あの 3 人、パイ・サンダーとかミア・アリスとか、あれなんやっつけ。

——「ダンガイオー（：破邪大星ダンガイオー）」。

宮脇：「ダンガイオー」ですね（：平野俊貴監督、キャラクターデザイン）。「ダンガイオー」とか、あの絵あたりの、そのあとからちょっと前ぐらいからかな。あと今もヤマトで作画やってる、おっばいのおっきな姉ちゃん。レモネアやったかな？違うな。

誰や、レモネアちゃうかったっけ、BOME さんのやつ、あとで聞こう。名前がもうどん  
どん年で忘れる。羽原さん（：羽原信義）のキャラクター。

——レイナ（：マシンロボクロノスの大逆襲）とか。

宮脇：おっぱい丸いじゃないですか。今メカまでやってる。菊池さんもそう言えばね、  
麻宮（：麻宮騎亜）さんもそうけども。そういう美少女は、最初の頃がそういった  
ところから始めて。だからそもそもは BOME さんのレジンで爆発的に売り出したのは、  
それぐらいかな、80 年代後半ぐらいか。

——そうですね。85 年から 80 年代後半ぐらいですよ。

宮脇：ですよ。魔女っ子ぐらいからとかですよ。 「クリィミーマミ（：魔法の天  
使クリィミーマミ）」（：キャラクターデザイン高田明美）もそうだし、そういうと  
ころからでした。だからエロエロなところからじゃなかった。みんなやっぱりすごい  
照れがありましたから。80 年代半ばで美少女を作るなんて、あんな恥ずかしいことは  
できませんもん。みんなほらパンツはいてるぐらいで、別にヘソもチチも見えないじ  
ゃないですか。水着が限界ぐらいですよ。すごいそういう意味で全員屈折してると  
いうか、なんかすっぽんぽんを作ったやつはそういかなかったですね。すっぽんぽん  
なかったよな。それまでは下手なし、すっぽんぽんあまりなかったしね、美少女アニメ  
ね。

——確かにそうですね。

——あと 80 年代って「マクロス（：超時空要塞マクロス）」が出た 82 年ぐらいを境  
に、アニメが急に猫（：ネコミミ？）と美少女の世界。

宮脇：ネコミミですよ。

——はい。なっていくという。このとこのフィギュアの変化っての同期していますか  
ね。

宮脇：どうでしょうね。まだあの時は、面白いのが、80 年代半ば。さっき言ったバブ  
ルになる時って、日東が『レダ（：幻夢戦記レダ）』とか『ファンドラ（：夢次元ハ  
ンターファンドラ）』とか、あと『みゆき』とか『タッチ』とかもうフィギュアにな  
っているんですよ。ツクダホビーがガレージキットよりもちょっと重い、同じような  
時代でね、ジャンボフィギュアとか作ったりとか、そういう、バンダイも『ミンキー  
モモ』ぐらいとか、あとラムちゃん作って。そのあとアライ（：株式会社有井製作所）  
あたりがロリコンを取り入れたボディで。

——アリの『サザンクロス（：超時空騎団 サザンクロス）』ね。

宮脇：アリの『サザンクロス』とか。でも美少女フィギュアでそういうことをどこも成功していない。リン・ミンメイフィギュアもイマイから出たりとかしたりとか。だからちょっとやっぱり、添え物、際物の味というか、そこまで真剣にあればやっちゃならん。メカはやっていいけど、美少女は本気でやったらあかんというのが。ホビージャパンの作例にしても何にしてもみんな下手なんですよ。みんな言うほどない。美少女の本質を今ほど美しいとか可愛いとか綺麗にはなんかになっていない。モデラーが作るとみんなダメだったよね。

いつが一番最初に。なんやろう。また BOME に。BOME さんはそういう意味では色塗りがすごく。彼の師匠である、ヘビーゲイジ（：ガレージキットメーカー？）だったり、安良（：安良ひろちか）くんというのが浅井真紀の師匠であり、海洋堂にいたすごい造形師が塗装するダースペーダーみたいな。暗黒卿のダークサイドの親玉みたいな。そういう思想性のあるやつが 1 人おったんですけど。だから塗装なり何なりはそういう中ではなかなか珍しいというか、みんな塗れない人も多かったですから。模型師でなかなかこれっていうのは綺麗な可愛らしい女の子を作れている、成功しているホビージャパンの作例でもあまり僕の記憶にはないですね。

——やっぱり試行錯誤が 5、6 年続いて。

宮脇：そうですね。それがだんだん。美少女を作ってもいいんだという免罪符は「まどか」ぐらいからバブルというか、それになってアニス（：アニス・ファーム）であったりなんだかんだになってきてからでしょうね。

——本当に平成に近づきつつある。

宮脇：つつある。80 年代終わりぐらいから。ワンフェスやりだして『美少女戦士セーラームーン』。ゼネプロがやめて、90 年ぐらいからはもう『セーラームーン』であったりとか。

——90 年代入っちゃうと本当に美少女と萌えの世界に入っちゃう。

宮脇：そうですね。もう萌え萌えだって。80 年代終わりぐらいの、やっぱりその「まどか」時代。あの時「まどか」がホビージャパンで席卷して、やりすぎて東宝から怒られて、全部の「まどか」が発売できなくなっちゃった。

——ああ、知ってます。覚えてます。

宮脇：雑紙がピンナップまでつけやがって、あれが問題になったんですよね。僕、2 分の 1 のこんなでっかい「まどか」をね、座ってる「まどか」。うちの「まどか」なん

ですけどね。作って「ホビージャパン」調子乗って、折り込みまで入れて、ピンナップなんて東宝からええ加減にせえと言われて。全部の著作権がストップされたんです。各メーカー全部。僕だけ、うちだけじゃなく。なんじゃそらってことが。そういう「まどか」事件があったりとかするような。いろんな事件があつて。美少女に関してはなかなかすんなりと進んでこなかったですね。あと BOME が、そういう意味では美少女の人間にはちょっと美少女オタクに聞いてもらわなければいけません。美少女はやっぱり美少女の枠として、デジタル美少女も含めて、宇野氏、ちょっと BOME 氏を呼んできてくれたら。いいですか。BOME、大丈夫ですか。それこそ BOME さんがやると美少女は、一緒にちょっと最初にやった方が BOME さんエンジンかけないとなかなか。あいつら、全てのオタクはご存じの通り、嘘つきですからね。それは悪い意味ではなくて、本当に天然で自分に魔法をかけて、人に「俺なんて」って。だいたいそれ自身が嘘じゃないですか。能動的に嘘はつかないけど、本人が嘘をついている。自分にそう言って正直じゃないというのは、それはもう当たり前ですよ。そんな嘘をつかない造形師なんていうのは、そんなわけがわからない。だから BOME さんも最初にちょっとうまくエンジンかけて BOME モードにしないと。

——どうもありがとうございました。

宮脇：いえいえ、全然。すいません。